水海道風土博物館 坂野家住宅

茨城県常総市

みつかいどうふうどはくぶつかん さかのけじゅうたく

書院（月波楼）

坂野家は、常総市内を流れる鬼怒川西岸台地の畑地や谷津田の点在する豊かな土地に土着して500年ほどになると言われる。江戸時代中期には幕府直轄地を見廻る役人の逗留場所やその出張所としての役割も担い、農家住宅でありながら薬医門や式台付玄関の設置が特に許された。約１haの敷地には主屋(重文)を中心として西に書院（月波楼）、北に文庫蔵、車小屋、三番蔵、藁小屋を配し、入口に薬医門(重文)がある。市では平成10（1998）年に建物と屋敷地を譲り受け、歴史的建造物と里山の風景を保存する「水海道風土博物館」として整備した。 主屋は 平成15（2003）年から平成17（2005）年まで、全てを解体し組み直す工法で保存修理を実施し、江戸時代末期(19世紀中頃)の姿に復元された。

主屋全景

見どころ

坂野家住宅は江戸中期に建てられた茅葺の伝統的農家型民家である主屋と、大正期の近代和風建築である「月波楼」と名付けられた書院から構成される。主屋は土間部、居室部、座敷部に分かれ、土間部では柱・梁などの構造、居室部では無双連子の蔀戸、座敷部では武家用として整えられた菊の透彫りの欄間を見られる。 対する月波楼は文化交流・創作活動のためのサロンとしての伝統を持ち、レトロな手延べガラス戸、巻上式の日除け、白茶のタイルを市松模様に配した風呂場の床など“大正浪漫”な雰囲気に溢れる。風呂場の唐傘天井や板戸の取手、庇の鱗屋根などの細部にまで“こだわり”が感じられる。伝統とモダン～二つの魅力ある和の空間を、ぜひ、ゆっくりと時間をかけて見て頂きたい。

2階南側濡れ縁

巻上式の日除け

2階北側掃き出し窓

2階掃き出し窓と鱗屋根

風呂場

書院へ通ずる廊下の窓

【月波楼】

江戸末期に建てられた初代月波楼は、文人当主のもと、多くの文人墨客が集うサロンとして建てられた。 現在の月波楼は二代目で、大正9（1920）年に建てられた近代和風建築の好例である。２階には奥行50cmの月見台のような濡れ縁が設けられ、室内から月(庭園)を眺めるための大きな掃出窓も手すりがあるだけで開放的である。開口部である窓は1・２階とも座敷の南北に配されて風通しもよく、 室内から南北両側の庭園を眺めることができる。二間半の床の間や付書院、 組子細工の欄間、 襖絵に描かれる四君子図（蘭・竹・菊・梅）など和風建築の伝統的要素とガラス戸や風呂場のタイル床など近代性を兼ね備えた佇まいとなっている。
座敷に座ると文人墨客たちが集える当時の様子が伺える。

2間半の床の間と付け書院

【主屋】

伝統的な農家型民家の特徴である「土間」や「四間取」の居室部、武家層の接客のための格式高い座敷部を配している。14畳敷の広間には無双連子を組み込む蔀戸を設け、その上の欄間、下の摺上戸により風通しと採光に工夫がなされ、奥行きはあるが開放的で明るい。居室部には縁のない琉球畳や蔀戸、座敷部には縁のある備後畳や襖、障子を用い、格式の違いを表している。

無双連子の蔀戸と欄間

建物名称	水海道風土博物館 坂野家住宅
建築年	主屋：江戸中期、書院：1920（大正9）年
構造・様式	主屋：木造平屋建・寄棟造（玄関入母屋造）・茅葺 書院：木造二階建・寄棟造・桟瓦葺
所在地	茨城県常総市大生郷町2037
電話	0297-24-2131
HP	http://www.city.joso.lg.jp/shigai/kanko/1420716457308.html
開館時間	（4月～10月）9時～18時　※受付17時まで （11月～3月）9時～17時　※受付16時まで 月曜日（祝祭日の際はその翌日）及び年末年始休館
アクセス	水海道駅からタクシー利用、距離9km（駐車場あり）
備考	国指定重要文化財(主屋・表門)、常総市指定文化財(書院)

弘道館

こうどうかん

茨城県水戸市

弘道館は水戸藩第九代藩主徳川斉昭（烈公）により1841(天保12)年に藩士とその子弟の教育のため創設された藩校である。藩校当時の敷地面積は約10.5haを有し、藩校としては全国一の規模で、敷地内には、正庁（学校御殿）・至善堂の他に文館・武館・医学館・天文台・鹿島神社・八卦堂・孔子廟などが建設され、馬場・調練場・矢場・砲術場なども整備された。

現在は、その一部約3.4haの区域が「旧弘道館」として国の特別史跡に指定されている。幾度の戦火を免れた正門・正庁・至善堂は国の重要文化財に指定されている。斉昭は弘道館を創設した翌年に梅林で知られる名園偕楽園を開いている。「一張一弛（いっちょういっし）」という孔子のことばにならい、この弘道館で文武の修業(一張)をし、偕楽園で修業の余暇に心身を休める(一弛)という一対の施設として構想された。弘道館は偕楽園とともに日本遺産にも認定されている。

見どころ

弘道館は幕末の動乱期を経て1872（明治5）年の学制発布により閉鎖されるまで総合教育機関としての役割を担った。明治維新にも大きな影響を与えたと言われる水戸の先人たちの足跡や精神に思いを馳せながら、正庁・至善堂の質実剛健で悠然と往時の姿を今に伝えるその姿を堪能して頂きたい。また、地図を片手に敷地を散策すると、四季折々の美しい花や樹木と共に弘道館の建学精神に沿った独特の工夫を凝らした各施設の配置も楽しむことが出来る。

特徴的な正庁玄関屋根
独立柱で支えられ、更に吊鉄物で上方に吊っている柿葺の下屋根がついている。

正門（国指定重要文化財）
様式は本瓦葺き四脚門。瓦には葵の紋が見られ、柱に1868(明治元)年の弘道館の戦い時の弾痕が残る。

藩校であるため、意匠に華美な装飾などはないが、ディテールに目を配るのも楽しい。

①正庁破風の懸魚、六葉、鬼瓦。
①②③魔除けや火災除けの猪目（ハート状の意匠）が鬼瓦や釘隠し、六葉に見られる。
②③④徳川家の葵の紋が瓦、釘隠し、畳縁などに入っている。寺社等でも用いられるこの紋縁畳は茨城県畳職業訓練校（茨城県高萩市）でつくられたものである。

正庁(国指定重要文化財)

正庁正席の間

至善堂(国指定重要文化財)

至善堂御座の間

【正庁(せいちょう)】
学校御殿ともいい、藩主が臨席して試験や諸儀式が行われた。藩主が床の前に座り、正席の間や二の間で行われた学問の試験や対試場で行われた武術の試験をご覧になった。床には付書院も有している。

【至善堂(しぜんどう)】
藩主の御座所（休息所）。正庁の奥にあり、御座の間をはじめ4室からなる。御座の間は、斉昭の七男で最後の将軍 徳川慶喜が大政奉還後の約4ヶ月間、厳しい謹慎生活を送った場所でもある。

2011年の東日本大震災によりこの弘道館も甚大な被害を受け、その修復の過程で、正庁正席の間と至善堂御座の間の床が二重床になっていることが新たに確認された。
正庁と至善堂は長廊下（十間畳廊下）によって結ばれており、それぞれ床、棚を備え、面取角柱、長押をまわした書院造である。屋根は、正庁の玄関左右側面を入母屋造とし、正庁の背面と至善堂は寄棟造で、すべて桟瓦葺である。輪違瓦が組み込まれた高さのある大棟も美しい。弘道館の建築は、書院造建築の正統を継ぐものであるが、大柄で簡素な手法は、まさに質実剛健で悠々とした趣があり、風格を感じさせる。

建物名称	弘道館
建築年	1841（天保12）年
構造・様式	木造平家建・書院造
所在地	茨城県水戸市三の丸1-6-29
電話	029-231-4725
HP	https://www.ibarakiguide.jp/kodokan.html
開館時間	9:00～17:00(2/20～9/30) 9:00～16:30(10/1～2/19)　12/29～12/31休館
アクセス	JR水戸駅北口から徒歩8分　駐車場有
備考	特別史跡、国指定重要文化財、日本遺産 写真：茨城県（弘道館事務所）

荒川家住宅（荒為）

茨城県筑西市

あらかわけじゅうたく（あらため）

旧店蔵北面

荒川家住宅の位置する筑西市下館地区は、下館藩五万石の城下町として成立し、江戸時代半ばより商業で繁栄した地方中心地であった。明治・大正期になると、外来綿や洋糸の販売のほか、足袋底木綿工場が設立され、産業資本が蓄積された。そして、国道50号沿いから金井町を抜ける街道沿いには、蔵造りの商家が立ち並んだ。現在も国道50号を挟んだ荒川家住宅(荒為)の向かいには国登録有形文化財の荒川家住宅(荒七酒店)があり、当時を思わせる。

見どころ

荒川家住宅の一番の魅力は、明治・大正・昭和という時代の職人たちの丁寧な手技が施された落ち着いた空間とともに、美味しい食事を堪能できるというところだろう。土蔵や庭に囲まれた落ち着いた和の外部空間、そして1階座敷、2階客間、奥座敷へと、趣の異なる和室を配した、商家の実用的な空間を体感して頂きたい。

また、土蔵造りに見られる屋根漆喰や軒の意匠、分厚い漆喰塗りの扉、植物がモチーフとしてデザインされた洋間の装飾的な天井や廻縁、ベランダの袖壁（うだつ）などの左官技術も必見である。周辺は、下館における伝統的な町屋建築が集積するエリアである。訪れた際には、商都下館の街並みも散策して頂きたい。

①

②

③

④

⑤

⑥

①前面道路からのアプローチ②店舗入り口③ベランダの袖壁④洋間天井装飾⑤袖蔵の窓のデザイン⑥土蔵の扉

主屋南面

荒川家住宅は、屋号「荒為」とし、明治・大正・昭和の時代を通して商都下館を代表する卸問屋である。国道５０号に北面して旧店蔵および袖蔵が建ち、背後に主屋、さらに中庭を挟んで土蔵が建っている。

1989（平成元）年に３棟ともに改修工事（屋根の葺き替え、外壁補修ほか）が実施され、歴史的建物の維持が図られた。

2006（平成18）年、この建物を永く保存し活かしていきたい、というご当主の意向で、主屋に、会席料理の店「食の蔵　荒為」がオープンした。2011（平成23）年、国登録有形文化財に登録された。

【主屋】

主屋は、木造2階建、寄棟造り、銅板平葺きの建物で、1888（明治21）年に木造平屋建ての住宅を買い取り、肥料・荒物・雑貨などを扱う卸問屋として開業したことに始まる。1892（明治25）年には2階部分を増築し、さらに、大正から昭和にかけて洋間が増築された。通りに面し東側の石積みのアーチをくぐり、狭い路地を抜けて主屋に至る。路地の奥には荷物を運んだトロッコレールが残る。

玄関土間を上がると、低い根太天井の座敷と廊下が続く。座敷には帳場の名残の金庫や囲炉裏がある。2階客間は竿縁天井で、床の間が付いた書院造りである。1階は一般顧客用、2階は上客用としていた。

大正から昭和にかけての増築部である奥座敷は、賓客用として、1階の和室と2階の洋間(アールデコ調)に分かれる。それぞれの客の立場や用向きによって室の格を使い分けしていた。室内外の境には縁側を配し、開口部が設けられ、戸外の景観を望むことが出来るように配慮されており、四季の変化を感じ楽しむ和の空間となっている。また、主屋は和洋折衷の建物として、地域と時代を代表する重要な建物の一つである。

1階　座敷

2階　客間

1階　奥座敷

2階　洋間

【旧店蔵】

旧店蔵は、土蔵造り、切妻造り、土瓦葺きの建物で、1908（明治41）年頃の建物と言われている。1933（昭和8）年に、前面道路の拡張工事により、建物を現在地に曳家し、また、袖蔵として3階建ての洋館を増築した。間口五間、奥行き三間半で、戸締り用の蔀戸も使われていた。

【土蔵】

土蔵は、旧店蔵とほぼ同時期の建物である。内部は間仕切りのない大空間で、三尺ごとに柱がたち、漆喰塗りの真壁が美しい。大空間を活かし、コンサートなども行われている。

建物名称	荒川家住宅（荒為）
建築年	明治時代ほか
構造・様式	木造二階建、土蔵造
所在地	茨城県筑西市田町甲929
電話	0296-21-1357
HP	http://www.city.chikusei.lg.jp/page/page001170.html
開館時間	食の蔵　荒為 [火～日]　11:30～14:30　17:30～22:00 月曜、第1第3火曜休み。ディナーは予約制。 旧店蔵・土蔵の内部の見学は事前連絡が必要
アクセス	ＪＲ下館駅から徒歩15分　駐車場有
備考	国登録有形文化財

御料理屋kokyu.（旧小西家別邸）

茨城県結城市

おりょうりやこきゅう（きゅうこにしけべってい）

結城市は江戸経済の大動脈である鬼怒川の要衝にあり、結城紬や農産物の流通する一大商業都市であった。小西家は江戸末期に近江から移住し、この地で造り酒屋を始めた。酒造業で財を成し、1926（昭和元）年に別邸としてこの建物を完成させたが、長らく邸宅としての役割を担うことなくひっそりと佇んでいた。

外観（主屋）

見どころ

最大の特徴は、筑波山の景色を楽しむために高床とした主屋だ。高床式（床下はコンクリート造の倉庫）の土台の上に木造建築が建てられ、北を除く三面に廊下が回り、外部の建物の周囲に巡らされた景色を見るための濡れ縁は回り縁となっており、その回り縁に沿って一面に張られている表面の波打ちが美しい大正ガラスが建物を特徴付けている。濡れ縁を支える持送り（もちおくり）にも美しく凝ったデザインが見られる。廊下は約6間の一本物の丸桁、天井は屋根の垂木をそのまま見せる野天井の仕上、障子は引分け猫間障子が使われている。広間天井は竿縁天井、五寸角の四方柾目の柱や、欄間の花を型抜きした透かし模様や格子模様のあしらい、床の間の欅の一枚板など至る所に贅が感じられる。高床式で回り縁になっていることで風通しも良く、日本家屋の良さを感じられる。訪れた際には、時を経て再び産声をあげた建物の歓びを是非とも感じていただきたい。

広間（御食事処）

濡れ縁を支えている持送り

野天井の回り廊下

後に地元結城市で古民家の料理店を開くために場所を探していたkokyu店主の目にとまり、親戚である大工棟梁が当主と同級生だったことが縁でこの建物を借り受けることとなり、2012（平成24）年7月から8か月間の改修工事を経て、2013（平成25）年3月に地元の新鮮な野菜を使った創作料理の店「御料理屋kokyu.」としてオープンした。

【配置】敷地内には付属の平屋造りの建物と高床式の主屋（店舗）があり、渡り廊下で繋いでいる。駐車場からのアプローチは渡り廊下をくぐり抜けるようになっており、建物内部への期待感が自然と高まる要素となっている。

駐車場からのアプローチ

玄関外観（店舗入口）

【主屋】高床式木造平屋建て寄棟造りの建物で、屋根の「鬼瓦」には、ご当主の名前「小西」が刻まれており、柄振り台といわれる鬼瓦を乗せる台には立浪模様が彫られている。内部においては損傷の激しかった漆喰の壁は全て上塗り部分のみ剥がして塗り直し、10帖と12帖の広間の畳敷は板張りに改修した。床の間と床脇の地袋の襖絵は当時のまま残されており、障子も紙を張替え、当時のものを利用している。

床の間と床脇

床の間を中心に店を演出し「和の空間」に添うようなかたちで料理も決められている。
天井の高い二間続きの広々とした空間で、歴史や趣を感じながら美味しい食事を堪能できる。

【付属平屋建物】一部を玄関として改修し、階段を上がった先には新たに和室が設えられ、渡り廊下との間にある組子細工の内窓がさりげなく空間を演出している。渡り廊下へと続く階段の蹴込板は取外しができる仕組となっており、昔ながらの知恵が感じられる。

玄関内観

渡り廊下

組子細工の内窓

建物名称	御料理屋kokyu.（旧小西家別邸）
建築年	1926（昭和元）年
構造・様式	木造平屋建（高床式）
所在地	茨城県結城市大字結城1085
電話	0296-48-8388
HP	http://kokyu.in
営業時間	12:00～14:00、18:00～21:00（昼夜共予約制） 月曜・火曜休み
アクセス	JR水戸線　結城駅北口より徒歩約15分
備考	見学は不可

矢中の杜（旧矢中邸）

茨城県つくば市

やなかのもり（きゅうやなかてい）

本館　（居住棟玄関前）

筑波山麓の南、つくば市北条地区に建つ矢中の杜（旧矢中邸）は、矢中龍次郎氏によって1938（昭和13）年から1953（昭和28）年まで、15年をかけて建設された近代和風住宅である。矢中龍次郎氏はセメント防水剤「マノール」をはじめとした建材の研究家であり油脂化工社（現在の株式会社マノール）を創業した実業家である。2008（平成20）年、所有者が移り空き家状態が長く続いた邸宅・庭園をのちにＮＰＯを構成するメンバーも加わり、少しずつ掃除をし地域の文化遺産として、再スタートした。

別館　（迎賓棟外観）

見どころ

矢中の杜の大きな特徴は、日本の風土を考えて作り上げた実験住宅でもあることだ。矢中氏が考える「建築とはどうあるべきか」という問いの答えを具体的かつ実験的に示している。特に換気についての工夫は邸宅の保存にかかせない性能を発揮している。邸宅内の各所に自然の循環による換気がなされるように設計されている。建具の足元の無双窓や、照明器具周りの排気口などは設計段階から計画されていた。

換気対策小窓

二間続きの応接間

照明器具周りの排気口

暖炉（マントルピース）

玄関ホール

五層窓

ケヤキの廊下

【本館（居住棟）】

本館は木造平屋建で一部に大谷石造の地下室がある。特徴的な陸屋根や山吹色の外壁のほか随所に設けられた通気口、部屋ごとに異なる建具、建築当時のまま残る調度品や設備など多様な魅力に満ちている。

大谷石造の地下室の通気口

陸屋根

書斎

座敷

【別館（迎賓棟）】

別館の構造は一階は鉄筋コンクリート造、二階は木造になっている。内部は豪華絢爛で格式高い意匠が随所に見られる。ずらりと並んだ色鮮やかな板戸絵、サクラやケヤキ、スギなどの見事な銘木。天井高の高い空間作り、特注の調度品など見所に尽きない。

和洋折衷様式の豪華絢爛な食堂

床の間のある応接間

建物名称	矢中の杜（旧 矢中邸）
建築年	1938（昭和13）年～1953（昭和28）年
構造・様式	本館：木造平屋+大谷石造 別館：鉄筋コンクリート造+木造
所在地	茨城県つくば市北条94-1
電話	090-6303-4531（NPO法人“矢中の杜”の守り人）
HP	https://www.yanakanomori.org/
開館時間	毎週土曜日（11:00～16:00　最終入場15:30）
アクセス	常磐道土浦北ICから国道125号線経由で約12km
備考	国登録有形文化財

春風萬里荘（北大路魯山人 旧宅）

茨城県笠間市

しゅんぷうばんりそう（きたおおじろさんじん きゅうたく）

（写真 庭園より西面を望む）

県中央部に位置する笠間市の中で、春風萬里荘のある旧笠間地区は周りを小高い山々に囲まれた盆地にあり、焼き物の産地として名高い所でもある。昭和40（1965）年に日動画廊の創設者である長谷川仁氏が、郷里である笠間に作家らと訪れた折、この地にアトリエを造りたいという要望を受け、「芸術の村」の構想が生まれた。同年の暮には北大路魯山人が住居としていた民家を北鎌倉より移築し、その中心に据え置き、「春風萬里荘」と名付け、翌年「芸術の村」が発足した。この民家は高座郡御所見村(厚木市近郊)の大庄屋の母屋を、昭和6（1931）年に魯山人が星岡窯の母屋として北鎌倉に移築したもので、昭和18（1943）年まで住居として使用していた。建物内部は魯山人の手による改造が随所に見られ、それらがほぼそのままに残されている。母屋の茅葺き屋根は適時葺き替えがされており、近年では平成19（2007）年より数年をかけ全面的な工事がなされた。また平成30（2018）年からは庭園改修工事が行われ、令和2（2020）年10月に完成している。
笠間日動美術館が昭和47（1972）年に開館され、春風萬里荘はその分館として現在も美術愛好家及び多くの人々が訪れる場所となっている。

見どころ

大庄屋の建物らしい重厚さに、「万能の異才」とうたわれ、万事に凝り性であった魯山人の美意識が加味され、時代をまたいでより一層懐の深い建物となっている春風萬里荘は、美術館として所蔵する名品の展示とともに訪れる者を飽きさせない。特に母屋土間左手の本来馬屋であった洋間は魯山人により改造されており、馬屋であった頃の馬をつないでいた柱や排気孔がそのままの姿で残され、自然物の生かし方や空間構成、遊び心など、魯山人の自由な感性・美意識を見てとることができる。また、風呂場は脱衣所を含め10畳間程の大きさで、長州風呂と上がり湯、洗い場がゆったりとした広さの中に配され、壁には魯山人自作の青竹を模した織部陶板がめぐらされ、豊かな色彩をなす。更には季節の花に彩られた心癒される庭園も見事であり、散策した先には地元の豪農から移築された江戸期の長屋門がどっしりと佇み、ここでは庭園を望みながらのランチも楽しめる。また、年に2回、右で紹介している魯山人設計 茶室「夢境庵」での茶会の開催もあり、鑑賞にとどまらず、贅沢な時間を体感出来る。

魯山人により馬屋を改造した洋間

洋間 魯山人作 手斧削りのベンチ
欅の小口を見せた木レンガの床

魯山人作の織部陶板を張り込んだ長州風呂

魯山人作 陶製アサガオ

江戸期 豪農の長屋門

長屋門 の重厚な軒廻り

【主屋】
茅葺き入母屋造りの重厚な構えのこの建物は、江戸時代天保年間に大庄屋伊東家の母屋として建てられた。式台のある玄関を入ると正面には12畳半の玄関間があり、その右手並びに仏間・客間の座敷が続く。客間は違い棚付きの２間の床の間に付け書院、組子欄間、さお縁天井など格式ある座敷となっている。玄関間の奥は神棚のある板間で、往時は囲炉裏があり魯山人はこの板間と続く6畳を居間として使用していた。三和土の土間は梁表しで、煤竹の天井が繊細に組まれており、吹抜の開放的な空間となっている。

【茶室】
「夢境庵」は千宗旦（千利休の孫）によってつくられた名茶室「又隠」を手本として、魯山人が設計した。北鎌倉に在った時は、母屋とは離れた茅葺き入母屋造りの独立した茶室で、魯山人の安息の場であった。移築する際に母屋(座敷奥)に付設され、現在はむくりを付けた桟瓦葺きに杉皮葺きの下屋根が廻る姿となっている。３畳の水屋、洞庫口を備えた4畳半本勝手からなり、床柱には黒柿の自然木、無目には南天の樹が用いられている。また躙り口に加え、貴人口が設けられ、出入りを容易にしている。

建物名称	春風萬里荘（北大路魯山人旧宅）
建築年	天保年間、1965（昭和40)年北鎌倉より移築
構造・様式	木造平屋建　茅葺き入母屋造
所在地	茨城県笠間市下市毛1371-1
電話	0296-72-0958
HP	http://www.nichido-museum.or.jp/shunpu/
開館時間	3月～11月　9:30～17:00 入館は16:30まで 12月～2月 10:00～16:00 入館は15:30まで 月曜日（祝祭日の時はその翌日）・年末年始 休館
アクセス	JR常磐線友部駅よりタクシー約15分(駐車場有) 水戸線笠間駅から徒歩約20分(タクシーが便利)
備考	笠間日動美術館分館（展示施設）

穂積家住宅

ほづみけじゅうたく

茨城県高萩市

穂積家は江戸時代中期に庄屋を務め、農業のほか造林地業・金融業・酒造業などを営み、明治初期には製紙工場を経営するなど、多角経営を行っていた上層階級の農家である。敷地面積は5492.82㎡、周囲を塀で囲み、中心に主屋、北側に衣装蔵、東側に庭園、南側に長屋門と前蔵を配している。現在は無料公開のほか期間限定古民家カフェや映画・テレビのロケ地として利用されている。1989（平成元）年、茨城県指定有形文化財に指定された。

見どころ

主屋の梁組・小屋組みのほとんどが建築当初材である。桁行・梁間に架け渡した釿斫り（ちょうなはつり）仕上げの松材の迫力ある小屋組みが見られる。今でも月に一度、半日をかけて燻蒸を行っている。軒付は茅を数段に積み重ね、中に竹の節裏を白く塗った飾りを揃えて巡らし、各隅は市松模様の装飾を施した『五段茅葺き中竹節揃角市松模様寄棟造り』になっている。

小屋組み

市松模様寄棟造り

建具の製作年は不明だが、欄間・格子組・帯桟・引手等の装飾が素晴らしく、細部にまでこだわりが見られる。

簀戸（葦戸）

欄間

平書院

便所間仕切りの装飾

襖絵

千鳥の引手

【長屋門】2階造りの門の東側に桁行3間、西側に桁行5間の平屋を接続させた特異な形式で、屋根は門の部分を入母屋造、左右の平屋部分を切妻造とし、桟瓦を葺く。昭和初期の改修でもともと平屋根だったものに2階部をのせるなど、数回の改築が行われている。

【前蔵】嘉永2（1849）年に建築された切妻造、妻入、2階建ての土蔵。桁行4間、梁間3間で屋根は漆喰を塗り固めた上に合掌を置き、桟瓦葺の屋根をのせる置屋根形式となっている。美しいなまこ壁が時代的な特徴をよく表している。

【主屋】安永2年（1773年）建設。約120坪の広さがあり、屋根は寄棟茅葺き、南突出部は入母屋造りの茅葺き、背面下屋銅板葺き。 北東面にあるオクザシキの北側には床の間・床脇・平書院が付き、かなり早い段階で床飾りを配した座敷を持っていた。

【衣装蔵】大正4年（1915年）に造られた切妻造の土蔵。昭和の改修により主屋から渡り廊下が設けられ、内蔵となった。桁行3間半、梁間2間半の2階建てで、1階に衣装棚、2階に床・違い棚を設けた10畳間があり、衣装替えのほか接客の場としても使われていた。

【庭園】江戸時代に作られたもので、屋敷の北を流れている関根川から水を引いた約100坪の水面を持つ回遊式庭園。中央には石造りの太鼓橋、石灯篭を配している。

建物名称	穂積家住宅
建築年	1773（安永2）年
構造・様式	木造平屋建・入母屋造・寄棟造・茅葺き
所在地	茨城県高萩市上手綱2337－1
電話	0293-24-0919
HP	http://www.takahagi-kanko.jp/page/page000008.html
開館時間	9:00～16:00 月曜日（祝祭日の時はその翌日）・年末年始休館
アクセス	常磐自動車道高萩ICから車で約１分　駐車場有
備考	茨城県指定有形文化財、高萩市指定史跡

かさま歴史交流館井筒屋

茨城県笠間市

かさまれきしこうりゅうかんいづつや

笠間市の観光の中心である笠間稲荷神社周辺には、初詣や春の陶炎祭、秋の菊まつりなど年間を通して多くの観光客が訪れる。近年、市では笠間稲荷神社の南側に位置する笠間稲荷門前通りの景観整備を進めている。その門前通りを見通せる場所に建つ「かさま歴史交流館井筒屋」は、平成30（2018）年4月1日にオープンした市の公共施設で、明治中期頃に建てられた木造3階建て瓦葺入母屋造り、三層に庇の取り付いた歴史ある建物「旧井筒屋本館」を改修整備して誕生した。

様々なイベントが催される建物前の交流広場

写真①　昭和初期の外観

写真②改修整備される前の外観

井筒屋は、江戸時代天保年間に旅館として創業。明治中期頃に、今の場所に木造3階建ての井筒屋旅館が建てられた。建築当初に2階と3階の客室の外側にあった欄干(写真①参照)は、昭和期の改修工事で取り壊され、客室の拡張が行なわれた。東日本大震災で被災した建物を、笠間市が引き受け、地域活性を促進する施設へと今回の改修整備工事が行われた。

複数棟あった建物のうち、木造3階建て1棟を残し約15mの曳家が行われ、広い交流広場が設けられた。建物の1階には観光インフォメーション、2階に歴史展示コーナー、3階には地域の人が利用できる会議室が設けられ、笠間の歴史や観光情報の発信、市民や観光客の交流の場となっている。

写真③　工事中の曳家の様子

外観は、縁廊下および透かし入りの欄干が復元され、縁廊下越しには障子窓が設けられ、建築当初の趣を感じる。旅館の敷石を再利用した中露地、当初材のケヤキ柱や天井梁組が現しとなった1階の観光インフォメーションや2階の吹抜けは往時の雰囲気を作り出している。意匠に配慮し綿密に計画された構造補強、新規材に施された古色塗装、床左官仕上げは当初材と馴染み、井筒屋旅館の当時の面影を感じさせる。

1階平面図

1階　観光インフォメーション

2階　梁組が現しとなった吹抜け

3階　和の意匠の会議室

見どころ

工事の大部分を占める木工事は伝統的工法で施工することが大事であり、内外装造作材及び仕上げ材の一部は、既存に使用されていたものを再利用されている。
中露地から交流広場に向かって敷かれている稲田石(稲田御影石。笠間地区一帯を産出地とし、日本の誇る最高級石材)は再利用材料のひとつであり、また、広場左右に広がり、色違いにも見える敷石には新規の稲田石も使用している。足元に注目すると当時の切出し技術の違いや色、質感を比較して楽しむことができる。

①交流広場の稲田石。
②中露地の再利用された稲田石。
③当時旅館で使われていた金庫と神棚。
④曳家工事リノベーションをした際に３階の屋根裏で発見された亀の絵が描かれた破魔矢。

江戸時代、稲荷信仰が江戸を中心に広がり、笠間稲荷神社へ多くの参拝客が関東一円から泊りがけで訪れるようになった。そして、井筒屋のような旅館が多くある門前町としても栄えるようになった。

<笠間稲荷神社>
日本三大稲荷のひとつ。

笠間市笠間1番地

建物名称	かさま歴史交流館井筒屋
建築年	明治中期頃
構造・様式	木造三階建　瓦葺入母屋造
所在地	茨城県笠間市笠間987
電話	0296-71-8118
HP	www.kasamaidutsuya.com
開館時間	9:00～21:00、月曜日(祝祭日の時はその翌日)休館
アクセス	JR水戸線笠間駅から徒歩20分
備考	

旧篠原家住宅

きゅうしのはらけじゅうたく

栃木県宇都宮市

旧篠原家住宅は、江戸時代から醤油醸造や肥料商を営んでいた宇都宮市を代表する旧家の一つである篠原家の明治28（1895）年に建てられた住居兼店蔵である。
敷地内には１・２階合わせて100坪の主屋と、新蔵、文庫蔵、石蔵の3つの蔵がある。黒漆喰や地元宇都宮産の大谷石を用いた外壁や、商家を特徴付ける店先の格子などが、明治時代の豪商の暮らしぶりを伝えている。建物は徹底した防火・防犯対策が施されており、屋根、外壁はもちろん、くぐり戸や揚戸などの建具にも当時の知恵と工夫が見られる。

見どころ

ＪＲ宇都宮駅前の歴史的シンボルとして戦火や地震をくぐり抜け、堂々たる風格で佇んでいるこの建物は、幾度も復元・修復を経て、街に愛される建物となっている。栃木地方特有の大谷石張の町家建築で、親近感を与えてくれる。宇都宮市へ寄贈されたのは、平成8（1996）年、一般公開されたのは平成9（1997）年と最近のことである。主屋の奥、裏は駅前の喧騒を忘れるほどの静かで落ち着いた空間であり、駅前のビル群の中、和を感じるポケットとなっている。

壁面：１階は大谷石張り、２階は黒漆喰塗り

商いの空間である主屋の内部では、1尺5寸角で全長11mを超える欅の大黒柱や、今ではめったに見られない欅や赤松の床梁組の力強さに圧倒される。また、今では珍しい生活用品や家具、建具などから当時の様子を偲ぶ事が出来る。
床の間の幅2間半の欅の一枚板や、廊下の4間もの長さの桧の床材、精巧で美しいデザインの箱階段等から豪商の財力と見識の高さがうかがえる。江戸時代末期に建てられた「石蔵」と「文庫蔵」、主屋と同時期に建てられた「新蔵」も大谷石を外壁として用い、北側からの防火を意識したつくりとなっている。
木造に土を塗り大谷石を張った文庫蔵の内部は丁寧に修復され、力強い架構が再現されている。
年月を経ても美しい自然素材と力強い構造美が豪壮な趣を醸し出している貴重な建造物である。

箱階段：総欅造り、引手は獅子のデザイン

床の間：床板は欅の一枚板。床柱は1階から通しの欅の大黒柱

建物名称	旧篠原家住宅
建築年	主屋・新蔵　1895（明治28）年 文書蔵　1851（嘉永4）年 石蔵　江戸時代の終わり頃
構造・様式	木造二階建桟瓦葺・土蔵造
所在地	栃木県宇都宮市今泉1-4-33
電話	028-624-2200
ＨＰ	https://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/kurashi/rekishi/geijyutsu/1016823/1016832.html
開館時間	9:00～17:00（月曜、祝日の翌日、年末年始休館）
アクセス	ＪＲ宇都宮駅　西口から徒歩3分
備考	主屋・新蔵…国指定重要文化財・市指定有形文化財

日光田母沢御用邸

にっこうたもざわごようてい

栃木県日光市

もともとこの地にあった銀行家小林年保の明治中期に建設した別邸に加え、当時、赤坂離宮などに使われていた旧紀州徳川家江戸中屋敷の一部（現在の3階建て部分）を移築し、その他の部分を新築し、明治32（1899）年に大正天皇の御静養地として造営された。その後大規模な増改築を経て、大正10（1921）年に現在の姿となった。床面積は1360坪で、3階を除くすべての屋根がひとつながりになっている。現存する明治・大正期の御用邸の中では最大規模である。ひとつの建物で、江戸・明治・大正時代の最高の建築技術や、建てられた時代や用途によって異なるいくつかの建築様式を見ることができる。和風建築の形態でありながら、一部に絨毯やシャンデリアなどを用いた和洋折衷の生活様式が採り入れられていて、近代和風建築につながる。建築学的にも大変貴重な建物である。

戦後御用邸が廃止となり、宿泊・研修施設等として使われてきた後、平成12（2000）年に栃木県による3年の歳月をかけた修復・整備で蘇り、日光田母沢御用邸記念公園として一般公開されることとなった。

見どころ

御学問所（梅の間）：書院風の角長押が数寄屋風の丸太の床柱に巻き付いた混在の作りになっている。

御座所入側：鳥の子紙の張付壁と張付天井、杉戸絵、黒漆塗りの硝子戸、そして畳敷きの上に英国製の絨毯を敷いた和洋折衷様式。

畳縁は、部屋の用途により、小紋縁、萌葱絹縁、中紋縁、繧繝縁が用いられている。また、長押の釘隠しや襖の引手の錺金物も、建築時期により異なっている。照明器具も部屋ごとに異なるデザインとなっている。

謁見所：もっとも格式の高い真の書院で、最高の材料で具現化された。

謁見所縁側：謁見時の視覚を和らげる為外側に傾斜が付いている。

廊下：黒漆塗りの竹の節欄間が付いている。

御日拝所：長押がなく、床の間の落掛が黒漆塗り弧形である。

皇后御座所：畳の縁は、萌葱絹縁

皇后御学問所：照明器具は赤色硝子

建物名称	日光田母沢御用邸
建築年	1899（明治32）年、増改築1921（大正10）年
構造・様式	木造平屋建、一部二階建・三階建、銅板葺
所在地	栃木県日光市本町8-27
電話	0288-53-6767
HP	http://www.park-tochigi.com/tamozawa/
開館時間	4～10月　9:00～17:00（受付16:00まで） 11～3月　9:00～16:30（受付16:00まで） 火曜日、年末年始（12/29～1/1）休園
アクセス	ＪＲ日光駅、東武日光駅より3km
備考	国指定重要文化財、日本の歴史公園100選

岡田記念館 翁島別邸

栃木県栃木市

おかだきねんかん おきなじまべってい

岡田家は550年以上の歴史を持つ旧家で、江戸時代に未開地を開墾して村民に生活の基礎作りを指導し安定した村落づくりに貢献した。これにより徳川家より「嘉右衛門新田村」の名称を賜り、以後代々の当主は嘉右衛門を襲名し、当代で26代目となる。
江戸時代、日光例幣使街道の開設に伴い屋敷内には陣屋が設けられ、代官職も代行し、地域発展のため寄与していた。現在も4000㎡の敷地内に、当時の建物が保存されていることから、別名「代官屋敷」とも呼ばれている。
代々の当主は芸術面にも関心が深く、巴波川の舟運や街道の往還を通して、文人、墨客との文化交流もあり、画家富岡鉄斎の韓信堪忍図をはじめ、文人の松根東洋城、陶芸家の板谷波山の作品など岡田家所蔵の品々が、邸内と共に「岡田記念館」として昭和53（1978）年より一般公開されている。
「翁島別邸」は、その敷地内にある、大正建築を代表する建物で、国登録有形文化財の指定を受けている。

見どころ

長さ6間半、幅3尺、厚さ1寸のけやきの一枚板を使用した1階廊下

横引き雪見障子と無双窓の組合せ

床柱：黒柿　落とし掛け：亀甲竹　天井：屋久杉

竹林の小路

湯気を逃がす天井通気口

岡田家22代当主岡田孝一が70歳の時に自らの隠居場所として別荘建築を手がけることを思いたち造られたのがこの「翁島別邸」である。大正3（1914）年に工事を始め、工事期間10年を有し、大正13（1924）年に完成した。用材は党首自らが木場に出向き吟味買付した銘木を使用し、町内練達の工匠が技を競い合って作り上げた。内部は、豪壮な雰囲気の中にも、日本建築ならではの細かなこだわりが施されている。浴室の傘天井も見事である。近年は、テレビ、映画のロケ地としても利用されている。
庭の竹林も風情があり、散策におすすめである。

床柱：紫檀黒檀鉄刀木

戸板：杉の糸柾目

2階の窓からは、富士山、筑波山、男体山の山々が見える。

建物名称	岡田記念館 翁島別邸
建築年	完成 1924（大正13）年
構造・様式	木造二階建、瓦葺
所在地	栃木県栃木市小平町1-23
電話	0282-22-0001
HP	http://www.cc9.ne.jp/~kauemon/
開館時間	9:30～17:00（土・日・月曜、祭日のみ）
アクセス	東武日光線新栃木駅より徒歩15分
備考	国登録有形文化財

益子参考館上台

ましこさんこうかんうえんだい

栃木県芳賀郡益子町

益子参考館上台は日本を代表する陶芸家濱田庄司（人間国宝）が来客者の宿泊所とする為に、益子町小宅の高野家主屋を昭和17（1942）年に解体移築したもので、完成までに約10年の歳月を要したと言われている。
濱田庄司が蒐集した工芸品を公開し、一般の人たちにも「参考」にして欲しいとの願いをもって開館された。

見どころ

【濱田庄司による改修デザイン】

内外部の改造の多くは、濱田庄司のデザインによるものである。間仕切りや照明器具等民藝の趣向を凝らしたデザインが施されている。
また館内には生活に役に立つ工芸という着眼のもとに蒐集された貴重な調度品が展示されている。濱田庄司を通した「民藝」という美の概念を体感出来る建物として重要な意義を持つ。

・モダンな洋間に改修された土間東側の馬屋跡。
低い天井に太い梁の落ち着いた空間に趣のある貴重な家具。時を忘れてしまう寛ぎの場所。

・濱田庄司デザイン照明器具

・国内外から蒐集された手工芸品の数々

・土間入り口脇にある建具は一見障子だが、和紙の代わりに沖縄の二枚貝を鉋で削って使用している。
薄く削られた貝は光を柔らかく通す。

大規模な寄棟造茅葺で南面に建ち、桁行１４間梁間７間、正面に入母屋造の式台を突き出す。式台の７層の軒づけは重厚な感じを与える。桁行６間が土間部で三重梁を架け、東側に馬屋跡、西側の土間境には居間、中廊下、北の間が並ぶ。棟高や軒高、平面構成、部材の古さなどからも江戸時代末期の創建と考えられる。

・囲炉裏では今も火を焚き虫除けとしている

梁・柱等の構造材の太さや、威厳のある外観と洗練された細部の意匠や造りが特徴で、大規模民家の風格を備えている。迫力のある茅葺屋根は20年に一度、3か所に分けて葺き替える。
上段の間は床棚付書院を備え、次の間と角間境には意匠を凝らした筬欄間がはめ込まれる等、整った室内構成をもつ。
入母屋造の玄関から入って要人を迎えるために使用する上座を含むフォーマルな空間は数寄屋建築とされており、日常を営む空間との対比も興味深い。
室内の壁は、鉄分と藁の経年変化によって味わい深い佇まいを醸し出している。

・上段の間　床棚付書院と筬欄間

建物名称	益子参考館上台
建築年	江戸時代末期　　移築1942（昭和17）年
構造・様式	木造平屋建
所在地	栃木県芳賀郡益子町益子3388
電話	0285-72-5300
HP	https://www.mashiko-sankokan.net/
開館時間	9:30～17:00　休館日…月曜日(月曜日が祝日の場合は開館し、翌日休館)年末年始　展示変え休館あり
アクセス	JR宇都宮駅→関東バス益子行45分益子参考館入口下車
備考	県指定文化財

横山郷土館

よこやまきょうどかん

栃木県栃木市

横山郷土館（外観）

横山郷土館は、明治時代の豪商、横山家の貴重な資料を展示した郷土館である。後に初代当主となる横山定助は、水戸藩士の子でありながら、今後の新しい時代における商人の活躍を予測し、栃木の特産品である野州麻に着目した。そして、江戸末期に麻問屋を起業した。

麻は、当時、衣類だけでなく、下駄の鼻緒の芯や魚網など、生活に欠かせないものにも幅広く使用されており、江戸との交易により成功を収めた横山家は、栃木県でも有数の麻問屋となった。その財を元手に金融業にも進出し、栃木共立銀行を設立した。そして、昭和初期に廃業になるまで、地域の金融を担ったとされている。

現在も、明治期に建造された建物をそのままに、館内には、麻問屋の帳場や銀行跡が残されており、当時の様子を偲ばせる景観を保っている。

見世の中央を境に正面向かって右が当初の前身があり、左が増築部分となる。内部には増築境辺りに痕跡が残っており、どの跡も丁寧な仕事が施され当時の繁栄を物語っている。

見どころ

横山家は、当時、店舗の正面向かって右側で麻問屋、左側で銀行を営んでおり、その店舗を抱えるようにして麻蔵、文庫蔵が建てられている。日本の商家としては、ほかに見られない両袖切妻造りという建築様式になっており、国の登録有形文化財に登録されている。

主屋の両袖に配置された石蔵は組石造りにも拘わらず東日本大震災による倒壊やズレが生じることなく現存した。当時の技術の高さが伺えるものである。また、軒先を煉瓦積みとする意欲的な建物でもある。

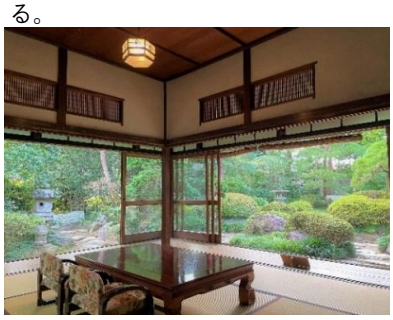
また、敷地の中央に広がる日本庭園には、大正7（1918）年に建てられたハーフ・ティンバー手法の洋館がある。当時、ゲストハウスとして使用されていたこの洋館は、内部には琵琶棚付きの床をもつ和室が混在し、和洋折衷となっている。

洋館(外観)

洋館(内観)

横山郷土館内には、回遊式日本庭園を一望できる大広間や本勝手の書院代わりに下地窓を施した数寄屋の雰囲気をもつ床の間、天井に屋久杉を使用した奥座敷などがあり、多様な魅力に満ちている。

明治30（1897）年頃に建造された麻問屋店舗跡と明治43（1910）年に増築された栃木共立銀行跡の境には梁の継手があり、店舗側は欅が使われているが、銀行側は「お客様を待つ」というゲン担ぎで、松が使用されている。また、店舗側が黒砂摺り漆喰なのに対し、銀行側は人造石研ぎ仕上げになっている等、店舗と銀行の造りの違いを楽しむこともできる。



回遊式日本庭園を一望できる大広間

数寄屋の雰囲気をもつ床の間

栃木共立銀行跡

屋久杉の天井

建物名称	横山郷土館
建築年	1897（明治30）年～昭和中期
構造・様式	麻蔵・文庫蔵：組石造り二階建て、店舗：木造(土蔵造り)平屋、住居：木造真壁造り平屋(一部二階建て)、洋館：木造大壁造り平屋
所在地	栃木県栃木市入舟町2-16
電話	0282-22-0159
HP	https://www.tochigi-kankou.or.jp/spot/yokoyama-kyoudokan
開館時間	9:00～17:00（最終入館16:30）
休館日	月曜日(祝日の場合は翌日)・年末年始
アクセス	ＪＲ・東武栃木駅から徒歩18分 蔵の街第１駐車場から徒歩4分
備考	国登録有形文化財、栃木市歴史的風致形成建造物指定

有形文化財ホテル 飯塚邸

栃木県那須郡那珂川町

ゆうけいぶんかざいほてる いいづかてい

「本宅」外観　江戸時代に当家の隠居として建設
軒を低くおさえた簡素な構え。庭でケータリングを楽しむ事もできる。

那珂川で水戸とつながる馬頭と小川地区の一部は、江戸時代水戸徳川領であり、馬頭市街に位置する「飯塚邸」は庄屋として、藩領支配の中で重要な役割を担っていた。
幕末水戸藩内の内乱状態の中、天狗党であった飯塚家は、元治元（1864）年に諸生党による打ち壊しにあい、新宅前庭の松には、その時に付けられたといわれる刀傷が残っている。
飯塚家本宅表門、脇門は保存状態が良好で江戸末期にさかのぼる歴史的建造物である。
その他、飯塚家新宅、本宅、その他の建物も明治期、昭和期に改築、修繕が実施されたが、江戸期から引き続く建物配置をうかがう事ができ、文化財的価値が認められることから平成15（2003）年には国登録有形文化財に登録された。
令和元（2019）年、飯塚邸の古き良きものを可能な限り現存し、リビング・キッチン等の設備を持つ長期滞在型の宿泊施設として快適性や機能性にこだわったリノベーションを施し「有形文化財ホテル飯塚邸」はオープンした。

見どころ

「本宅」リビングルーム
凝った建具や欄間を用い、畳割による平面計画など
丁寧な造りや間取りはそのままに活かしながら
上質で現代的な家具や計画された間接照明を配置。
新旧のバランスを塗装や建材の色で統一している。
時代の違和感を全く感じることなく、寧ろ懐かしく
落ち着けて、心地よい空間が演出されている。

「新宅Ｂ」寝室
畳の上にシモンズのセミダブルのベッドが新鮮。障子や書院の格子のデザインや竿縁天井が空間を引き締めている。
機能面では、断熱工事は随所にされており、古民家再生の課題となる快適性は十分満たされている。長期滞在の旅行者向けにコンセントや収納の配置が細かく考慮されている。

床板にコンセントカバー

畳の上の現代家具

受付も兼ねた「新宅Ｂ」入口

広い敷地の中に、本宅、新宅、文庫蔵、中庭、表門、裏門が配置されている建物を客室として「邸の部屋」と「蔵の部屋」2つのタイプに分けている。
「邸の部屋」は新宅と本宅を利用、広いスペースと充実した設備で大人数や長期滞在に適している。
「蔵の部屋」は蔵をロフト式に改装してあり、コンパクトにまとめられた空間。少人数や短期滞在に適している。

「土蔵A.B」2室玄関は共用で
左右のドアで各部屋に別れる

大梁の存在感と吹き抜け

「文庫蔵」と「新宅中庭木戸」

登梁と地棟の天井

宿泊施設以外のホテルの機能は町の中に点在する。
食事や飲食、は那珂川町の中で提供。物販や体験施設も送迎も含めて提供している。
「飯塚邸」という歴史的建造物が宿泊施設という新たな役割を担うことで、昔そうであったように、地域の人々や訪れた人達の交流の拠点となり、建物だけに留まらない再生の可能性を感じる。

建物名称	有形文化財ホテル 飯塚邸
建築年	江戸末期～1908（明治41）年 改修2018（平成30）年～2019（令和元）年6月
構造・様式	木造平屋一部二階建、土蔵造二階建、木造平屋建
所在地	栃木県那須郡那珂川町馬頭360
電話	0287-82-7551
HP	http://www.iizukatei.ohtawaragt.co.jp （宿泊予約はホームページ参照）
アクセス	JR氏家駅からバスで馬頭車庫行、南町下車徒歩１分
備考	国登録有形文化財

岡部記念館「金鈴荘」

栃木県真岡市

おかべきねんかん「きんれいそう」

重厚感ある玄関側に比べ、庭園から見る建物は軽やかさすら感じられる。華奢な手すりや庇等の細やかな意匠が関係されるのか、非常に興味深い。

江戸中期、「真岡」といえば、木綿の代名詞。丈夫で質がよく絹のような肌触りの真岡木綿は殿様の肌着に愛用されるほど絶大な人気で、江戸の問屋はこぞって真岡木綿を求めた。建物はその真岡の木綿問屋としても栄えた岡部呉服店の２代目岡部久四郎氏が建築材料等を多年にわたり集め、明治初期に10年余りの年月を費やし建築した別荘で、重厚な外観に華奢な内観が特徴的である。

建物は外壁を防火目的で土蔵造りとし、北側のみ黒漆喰塗、その他をなまこ壁の仕上げとしている。南北の窓は本格的な観音開の防火扉（銅板貼）を設けている。内部は主要室すべてが書院造風の座敷で構成され、１、２階共に北側に１間、南側は襖を介し４間が続く。西側通り沿いに別棟にて店舗を有し、昭和27（1952）年まで岡部家の別荘として関係者の接待や呉服の展示会場として使用された。障子を開け放てば美しい庭をのぞみ、建具操作での日本間特有の可変性を大いに感ぜられる。昭和63（1988）年6月まで割烹料理店「金鈴荘」として利用され、同年8月に市が借り受け、真岡市近世百年の歴史・文化遺産として後世に引き継ぐため、岡部記念館「金鈴荘」として保存されている。

見どころ

「金鈴荘」の魅力は、こだわりの材料と技がふんだんにみられるところにある。大工、指物師は出入りの職人を３年間東京で修業させたという。廊下の軒桁には20m弱の杉が１本通され、大スパンの開口に当時からの歪みあるガラスが美しく、庭を魅せている。内部造作には、床の間部分は全て紫檀、黒檀、鉄刀木（たがやさん）の唐木が使用されており、また襖類は黒檀の、鉄刀木の枠で襖紙は絹下地に金箔を五層施すなど贅をつくしている。内部にある書画骨董類は、この地方にゆかりの深い作者のものが多く、文化財として価値あるものも少なくない。訪れた際には、空間ともに美術作品として、ぜひ観賞いただきたい。

廊下

唐木の棚

唐木の造作

天袋襖絵

襖絵山水画

再現された照明

手水鉢

磯山石の塀

１階：「あじさい」の間

１階：「ゆき」の間より

2階：「うめ」の間よりホールをみる

2階：「つき」の間より

庭は1600㎡の回遊式の日本庭園で、池を配し、堀、石塀、礎石等には地元の磯山で切り出された、磯山石（現在採掘されていない）を使用しており、庭を取り囲む石塀は市の登録文化財にもなっている。
小説家・有島武郎の代表作「或る女」の女主人公「早月葉子」のモデルといわれる「佐々城信子」が後年暮らした所でもある。庭園を含む風情豊かな空間は映画やドラマのロケでも使用される機会も多く、また、市民から一層の利活用が望まれており、今後の展開にも注目されたい。

建物名称	岡部記念館「金鈴荘」
建築年	明治中期
構造・様式	木造二階建・寄棟・瓦葺・土蔵造り
所在地	栃木県真岡市荒町2096-1
電話	0285-83-2560
HP	https://www.city.moka.lg.jp/toppagekanko_bunka_sports/6/2/3357.html
開館時間	10:00～16:00まで（最終入館時刻） 休館日：火曜日（祝日の場合は翌日） 年末年始（12/28～1/4）
アクセス	北関東自動車道真岡ICより車で10分　無料駐車場あり
備考	栃木県指定有形文化財（建造物） 真岡市登録文化財（石塀）

瀧澤家住宅

たきざわけじゅうたく

栃木県さくら市

鐵竹堂（てっちくどう）　入口の御車寄

明治25（1892）年の陸軍大演習の際に明治天皇の小休所となった
この建物は明治から大正にかけて活躍した栃木県屈指の実業家、
瀧澤喜平治の住宅。
通りに面して塀を巡らし長屋門を開くなど重厚な雰囲気を醸し出す

明治33（1900）年に再度の行幸に備えて「鐵竹堂」が建築された。
平成10年に県指定文化財として認定され、
この地域の歴史を語るシンボルとされている。

上質な材料と意匠が目立ち、近代和風建築の水準を
知ることができる貴重な建物である。

御座の間

見どころ

蔵座敷
西側の塀沿いに建つ蔵座敷は、洋風望楼(ぼうろう)が
特徴で、この地区の象徴的な建物。
明治20（1887）年の墨書が残る伝統的な土蔵作りの
建物の屋根部に、明治25（1892）年の明治天皇の行
幸を機に、望楼を増築。

長屋門
旧奥州街道沿い
江戸時代の武家屋敷に習った本格的な明治期の長屋門

建物名称	瀧澤家住宅
建築年	1887（明治20）年～1900（明治33）年
構造・様式	木造書院造り、土蔵、長屋門
所在地	栃木県さくら市櫻野1365
電話	028-682-2176
HP	https://sakura-navi.net/tourism-speciality/tourist-spot/sightseeing/history/takizawa-family-house/
開館時間	9:00～15:30（最終入館は15:00）
休館日	毎週月曜日、毎月第3火曜日、祝日の翌日、年末年始
アクセス	JR氏家駅から徒歩15分
備考	栃木県指定文化財

Gallery HANNA-絆和-

栃木県宇都宮市

ぎゃらりー　はんな

むくり屋根の玄関

宇都宮市役所から西へ向かう『あずき坂』のなかほど、
住宅地の一角に『gallery HANNA-絆和-』がある。

昭和20（1945）年の宇都宮空襲で市街地は焼け野原となったが
この建物は残った。

どっしりとした門に菊の花を染め抜いた藍色の暖簾が
かけてあればOPENの合図。
ガラガラとガラス戸を開けると美しい空間が広る。

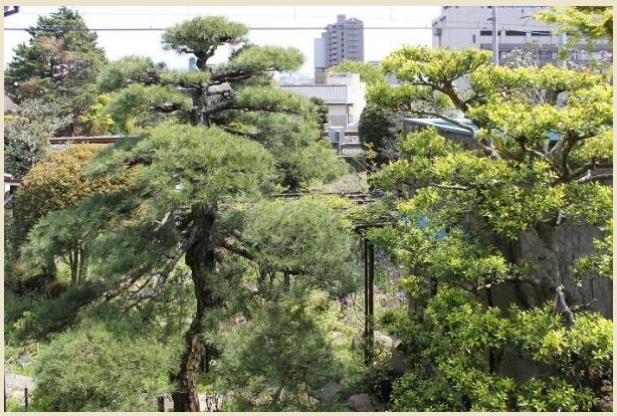
玄関から入るとすぐ横に、モダンな佇まいの
高い天井の小さな洋間。
この地域にはこのようなお宅が何件かあるようで、
外から見てもわかる印象的な建物だ。

組子細工の障子・黒漆喰の壁。
奥の続き間には縁側があり、しっとりとした庭が眺められる。
急勾配の階段を上がると、目の前には電車が通る。
ゆがんだ硝子・二重鴨居の和室。

宮崎駿さんが戦時中疎開していたという　この建物には
あちらこちらに、映画のワンシーンを連想するような
風景がある。

見どころ

上品な建具や欄間の装飾は当時のまま



庭ごしに見える線路にときどき電車が通る

月ごとの企画により展示内容は変わる
建物の魅力を引き出すディスプレイ

建物名称	ギャラリーハンナ
建築年	1931(昭和6)年
構造・様式	木造二階建
所在地	栃木県宇都宮市松が峰2-7-17
電話	028-638-6123
HP	Gallery HANNA (galleryhanna.com)
開館時間	イベント開催中のみ開館
アクセス	東武宇都宮駅より徒歩8分
備考	県内外・時に国を越えて作家さんの商品を紹介する 催事を月1回のペースで開催

彦部家住宅

ひこべけじゅうたく

群馬県桐生市

長屋門（屋敷の表門）の桁行16.2m梁間3.8mの屋根は茅葺き・寄棟造り。門をはさみ土塁と堀が巡っている。屋敷内には主屋と付属屋の冬住みと呼ばれる隠居屋、穀倉、文庫倉、医務所などがあり良好に保存されている。定住したと伝わる永禄年間以降、由緒ある家柄の館として整えられた。

主屋は入母屋造り・茅葺き、桁行約18m、梁間約11mで、規模は大きい。建築年代は江戸前期と推定される。全国的に見ても古い遺構であり、当時の上層農家の姿を伝えている。

見どころ

東西130m、南北100mの方形の土塁と濠をめぐらせた彦部家住宅は、渡良瀬川右岸の広沢丘陵手臼山の東の麓に位置している。彦部家の祖は家伝より天武天皇の第一子高市親王となっている。また源氏の直系にもあたることが分かっている。彦部家住宅は戦国時代より地域に貢し、農業のかたわら敷地内に学問所「松広学舎」を設け、国学・薬学・華道に通じた文化人を輩出してきた。近代では桐生織物経営や産地の指導者として貢献してきた。敷地内の建物も織物や染め物の作業に使われ、今もそのたたずまいを残している。庭園は池泉回遊式で、室町時代の貴族武士の香りを伝えている。

現在は春の市民茶会に始まり、体験教室、全国重文民家の集い、むかしの暮らし体験、秋の紅葉狩りなど数々の人々の勉強の場、憩いの場、なごみの場として開放されている。

主屋は東半を土間、西半を居室としている。柱や梁は全体的に細く、オクザシキの押板形式のトコや、広間のタケスノコ床など、構造や手法に古式が見られる。

平成7（1995）年から平成12（2000）年の解体修理に伴って土間や建物周辺の発掘調査を実施したところ、当初と考えられる便所、雨落ちなどの遺構や陶磁器などの遺物が発見された。関東地方では最古に属する民家である。後に、放射性炭素14調査法により建築年は1580年と判定された。

冬住み（隠居屋）

文庫倉・穀倉

神棚から竹ヶ岡八幡宮を見る

からめ手口

建物名称	彦部家住宅
建築年	主　屋：1580（天正8）年　長屋門：18世紀頃
	冬住み：1814（文化11）年　文庫倉：江戸中期
	穀　倉：1856（安政3）年
	からめ手口・櫓台：16世紀中頃
構造・様式	主　屋：木造平屋建・茅葺入母屋造
	冬住み：木造平屋建・茅葺寄棟造一部瓦葺
所在地	群馬県桐生市広沢町6-877
電話	0277-52-6596
HP	http://www.hikobeke.jp/
開館時間	土・日・祝日　10:00～16:00（平日は要予約）
アクセス	北関東自動車道・太田桐生ＩＣより10分
	ＪＲ桐生駅よりバス26分　東部桐生駅よりバス18分
備考	国指定重要文化財、群馬県指定史跡

富沢家住宅

とみざわけじゅうたく

群馬県吾妻郡

養蚕は奈良時代から全国に広まった。江戸幕府が養蚕を推奨したため、良質な生糸が生産されるようになり、明治にはいると金銀銅の海外流出を防ぐための主要な輸出品となった。その隆盛期に、群馬の生糸は輸出量の相当量を占めていた。

名主であった富沢家は米作・養蚕・麦雑穀や繭等の取引、駄馬による運送業や金融業などで財をなした。現在復元されている建物は18世紀末に大型養蚕農家として建築された。木造２階建ての入母屋造、茅葺、屋根の正面が「かぶと造り風（平かぶと造）」である。その他の屋根は下屋と一体となる。換気のための高窓（ヤグラ・ウダツ）を設けている。出桁造り、東西約24m、南北約13mある。２階は間仕切りのない一室として蚕の飼育に使われた。１階より張り出した部分に手摺りをつけてベランダ状にし、通路としたり桑の上げ下げ作業をしやすくするなど活用された。昭和61（1986）年25代富沢清氏より中之条町に寄贈された。

群馬県独特の養蚕農家の屋根形式である「赤城型」「榛名型」と共に「前兜造り」と称せられ、正面を切り上げて兜のような形をしている。貴重な建物として復元された。

見どころ

１階は作業が十分にできるよう、また運送業の荷物を預かるため広大な土間（台所）とした。台所の下出には馬小屋、唐臼場（精米）、かまどが設置されていた。家族用の囲炉裏のある居間、奥には「オモテノデー（表のでえ）」「ナカノデー（中のでえ）」「ジョウダン（上段）」と三間続きの客用の部屋がある。名主であった当家は幕府の役人など身分の高い人が宿泊にもちいたため、武家の好んだ書院造で、細工の施された欄間も見どころである。

デードコと呼ばれる土間

土間北側の小屋裏

ジャシキと称した居間。ウワイロリがある。

居間には養蚕用の小屋裏へ上る階段がある。

居間の天井

押入れのあるオモテノデー

書院のあるジョウダン（上段）

表部分「出桁（梁）造り」：１階の側柱より２階の床が一尺突き出している。１・２階共、深い軒出を農作業などに活用。

両妻側の破風に設けられた換気のための窓

建物名称	富沢家住宅（大型養蚕農家）
建築年	18世紀末（推定）
構造・様式	木造2階建て、入母屋造、茅葺
所在地	群馬県吾妻郡中之条町大字大道1274
電話	0279-76-3111（中之条教育委員会）
HP	http://www.town.nakanojo.gunma.jp
開館時間	9:00～17:00
アクセス	ＪＲ中之条駅から新治方面へ タクシーの利用を推奨
備考	国指定重要文化財

蔵・柏屋四郎右衛門

くら・かしわやしろうえもん

群馬県藤岡市

写真：蔵・柏屋四郎右衛門

絹の取引を行う絹宿として創業して300年あまりが経つ柏屋旅館内の明治12（1879）年と明治25（1892）年に建てられた蔵２棟を再生した、うなぎを中心とした食事処である。地域の文化的交流・発信の場、ギャラリー・サロンとしても利用されている。
藤岡は江戸時代には絹の集積地として月に12日の市が立つほど賑わっていた。江戸や明治からの建物が軒を連ねていた藤岡の街並みが、時代の波に押され変貌していく中で、歴史と文化を大切にしたいという気持ちから蔵の再生がなされた。
蔵は細い道に面していてセットバックの必要があり、曳家をした。2つの蔵の異なった形状を維持したまま連結し、中央に玄関を配置した。来客がその日の気分でどちらかの蔵を選択出来るようになっている。歪み傾きを矯正し、傷や汚れを取り除き、創建当時の輝きが戻った。工期も費用もかかったがあえて行った。
玄関に張り出した瓦屋根が建物の美しさを引き立てている。よみがえった蔵は藤岡の商店街の街並みに大きく貢献している。

見どころ

室内は雰囲気の違った4つの部屋からなる。蔵独特の力強い梁と少ない間口を上手に生かし、老舗の風格の中に洗練されたモダンで落ち着いた空間をつくりだしている。
ご先祖様から受け継いだ大切な欅の大戸も設置した。継承してきた調度品が店の中に程よく置かれ、豪華な雰囲気に一役かっている。特に１階と２階に置かれた屏風は、あわせて六曲一双となり、比叡山をのぞむ琵琶湖を表現していると思われる。江戸時代から続く旅館も、時代に合わせながら営まれている。

１階と２階に六曲一双の屏風が置かれている。

屋根の瓦は、すべてを手作業でつくった。天日干し後、遠磨釜で焼いた藤岡瓦（いぶし瓦）に葺替え、鬼瓦は既存を再利用した。
外壁はモルタル下地の上、漆喰塗りで、腰壁はなまこ壁を施工した。

蔵は火災や地震、盗難等から貴重品を守り続けてきた。「今でもご先祖様の息遣いが聞こえてくる」とのこと。

写真：蔵・柏屋四郎右衛門

床暖房が施され、冬でも快適な空間となっている。快適さや利便さを実現しながら、配線や配管を一切見せない精緻で美しい空間がつくられている。

建物名称	蔵・柏屋四郎右衛門
建築年	1879（明治12）年と1892（明治25）年建設 2004（平成16）年改修再生
構造・様式	木造２階建・蔵造り
所在地	群馬県藤岡市藤岡55
電話	0274-22-0006
HP	www7.wind.ne.jp/kashiwaya/
開館時間	11:00～14:00、17:00～19:00 （夜は電話にて予約。日曜の夜は休み）
アクセス	ＪＲ藤岡駅より徒歩10分
備考	日本民家再生協会主催　よみがえる蔵・店舗ギャラリー部門入選　藤岡市都市景観賞受賞

臨江閣

りんこうかく

群馬県前橋市

本館

臨江閣は、本館・別館・茶室からなる近代和風建築。本館は、当時の県令楫取素彦の提言により、地元有志や銀行などの寄付によって、迎賓館として建設された。明治26（1893）年の明治天皇の行幸の際の行在所として、その後も皇太子であった後の大正天皇がご滞在するなど、多くの皇族方がご滞在された。茶室も、本館と同時期に、県庁職員らの募金によって建てられた。別館は、明治43（1910）年に前橋市で開催された一府十四県連合共進会に先立ち、貴賓館として建設され、共進会閉会後は、大公会堂として利用されてきた。

別館

見どころ

別館の玄関から入館すると、ホール左手には、中廊下を挟む南北の和室が続き、欄間も必見である。ホール右手には西洋間、2階に上ると180畳の大広間が広がる。その大広間の天井高や大床の一枚板の杉の天井、縁側のガラス越しに降り注ぐ光の表情など、時間を忘れて楽しめる。渡り廊下から続く本館に入ると、「一の間」からの眺望もまた楽しめる。縁側、縁桁の丸太も美しい。2階の「御座所」として使用された和室も見どころである。
臨江閣の細部の仕様の数々には、日常の生活空間にはない非日常的な和の設えが見られる。市民をいつでも迎え入れ、利用もできる地域に愛される「和の空間」となっている。

【本館】
渡り廊下から本館に入ると、襖で仕切られた和室４室が続く。西に位置する「一の間」には、矩折りに床の間がある。また、かつては能舞台としても使えるようになっており、床下には５個の壺が埋設してある。その先に奥座敷２室がある。２階には、明治天皇行幸の際「御座所」として使用した12.5畳の和室と「次の間」がある。

【別館】
棟飾りの鴟尾、破風の狐格子、唐草の懸魚、軒下の舟肘木など、外観には寺院建築の手法がみえる。入母屋造、洋小屋組で、内部は中廊下を配し南北に7室の和室があり、北の和室の床の間は本勝手、南は逆勝手の床の間になっている。ホールを挟み60畳の天井の高い洋間には長押が廻り、床は板張りである。

本館

２階の大広間は、畳が敷かれ長押が廻り格天井で天井高も高く、開放感がある。18尺の大床の左右には、9尺の脇床が設けられており、大床の天井材も見応えがある。西洋間上の２階の床梁を、鉄筋で補強している。また、その一部分が見られるようになっている。

【茶室】
茶室は、茶席が京間４畳半・本勝手・下座に床の間を持つ形式で金森宗和の系譜に属するものと思われている。通常は、外観のみ見学可能。

建物名称	臨江閣（本館・茶室・別館）
建築年	本館・茶室：1884（明治17）年 別館：1910（明治43）年
構造・様式	本館：木造2階建数寄屋造・別館：木造2階建入母屋造
所在地	群馬県前橋市大手町3-15
電話	027-231-5792
HP	https://www.city.maebashi.gunma.jp/index.html（前橋市）
開館時間	9:00～17:00（月曜休館・入館は16:30まで 祝日の場合は開館、翌平日休館）
アクセス	ＪＲ前橋駅よりバスるなぱあく・臨江閣前徒歩1分
備考	本館・茶室・別館：国指定重要文化財

富岡市社会教育館

群馬県富岡市

とみおかししゃかいきょういくかん

富岡市を一望できる小高い丘に位置している。一間薬医門を入ると富岡市社会教育館が現れる。昭和初期の近代和風建築で、設計は伝統建築を先導した大江新太郎（日光東照宮の修復・明治神宮の造営に関わった）の主宰する「大江國風建築塾」による。水平線を強調した構成で、屋根形状は切妻と入母屋を組み合わせ単調さを回避し、軒裏は木小舞の化粧軒裏としている。数寄屋風建築物で配置は雁行型、外壁は真壁造・漆喰塗り、腰竪羽目板張りである。東西の長さは116mあり、東からの講堂棟・渡り廊下棟・客室（講師室）棟・玄関（２カ所西二ノ口と東）・研修棟・厨房・その他棟が連続している。床面積は1460㎡（440坪）である。庭園と建物との要素が一体化していることなど近代和風建築の要素を色濃く表現しているが、椅子座・キングポストトラスなども採用されている。当初は精神修養を目的に「東國敬神道場」として建設された。現在は市民の社会教育・研修や各種の講座の場として使用している。2005（平成17）年から富岡市が所有し管理・運営を行い、2008（平成20）年に国登録有形文化財として登録された。西隣に重要文化財の社殿群のある「下り宮」として有名な上州一ノ宮貫前神社がある。

見どころ

日本の伝統的建築要素が随所に採用されている。講堂の室内は高い格天井で、床は高床式で濡れ縁を回し高欄を取り付けている。床下の目隠しには竹簾を張っている。戸袋等に網干文様（あぼしもんよう）の装飾モチーフ（大江の代表作にも施工）が施されている。講堂と客室（講師室）棟を結ぶ長い廊下の天井の小舞化粧軒裏や玄関の欄間も見どころである。

客室（講師室）棟は主室15畳、次の間10畳、四方に畳敷きの床と榑縁が巡っている。東側・南側は全面ガラスはめ込み格子戸で庭園や遠い山並みまで見ることができる。

主室には付け書院（組子障子）や床の間・脇床が設けられている。特に荷室を仕切る欄間が美しい。

客室（講師室）棟～廊下：地形を生かした庭園が楽しめる。廊下の下をくぐると、反対側の北の庭園につながる。

講堂（1935年建築）：入母屋妻入、玄関は切妻である。内部は60畳で、正面・側面に広縁、背面に演壇がある。旧神殿が北に突出し、西には渡り廊下がつながる。大きな入母屋破風と切妻屋根が威厳を示す。内部の床は高床式で、軽快さが感じられる。講堂から客室（講堂室）棟をつなぐ廊下には両面に窓が設けられ、四季折々の南北両面の庭園を楽しめる。

建物名称	富岡市社会教育館
建築年	1936（昭和11）年
構造・様式	木造平屋建　寄棟造・切妻造・入母屋造
所在地	群馬県富岡市一ノ宮1465-1
電話	0274-62-2033
HP	http://www.city.tomioka.lg.jp/www/contents/1569802972607/index.html
開館時間	見学：随時、月曜・祝祭日休館　利用：9:00～21:30（事前申込）
アクセス	上信電鉄　上州一宮駅から600m
備考	国登録有形文化財

旧井上房一郎邸

きゅういのうえふさいちろうてい

群馬県高崎市

南側外観。杉材縦板張りの外壁、日差しや雨を調整しつつ建物に奥行きを与える深い軒が印象的。雨樋は無い。

高崎市の文化振興に大きく貢献した井上房一郎（1898-1993）の自邸である。
チェコ生まれのアメリカ人建築家アントニン・レーモンド（1888-1976）は、この前年に東京麻布に「笄（こうがい）町の自邸（1951）」をつくっていた。
戦前から親交があった井上は、レーモンドの自邸建築の際に妙義山から自然石を運び庭の石組に参加した。
「笄町の自邸」を身体で感じ深く感銘を受けた井上はレーモンドの快諾を得て、「笄町の自邸」の正式な図面が少ない中、自身の建設会社の職員を連れ実測した上で瓜二つの住宅を建築した。井上邸は、母屋との関係で「笄町の自邸」を東西反転した鏡写しの平面形状である。また、居間に続くノエミ・レーモンドのアトリエ部分はなく、洋風の寝室の隣に和室を設けている。居間の床もプラスチックタイルからカーペット敷きに変更し、土足から下足を脱いだ生活とした。プールと石と林の庭は、灯篭と竹の日本庭園に変更されている。レーモンドが食事の場としても利用したといわれる垂木を藤棚とした雨の落ちる中庭は、井上邸では垂木の上にガラス板をのせたパティオとなっている。

見どころ

レーモンドが建築をつくる上で規範とした「五原則（単純性、経済性、直截性、構造の正直さ、自然性）」と、そこから生まれた「レーモンドスタイル」を間近で見ることができる。尺モデュールの整然とした平面に、丸太を平割りした鋏状トラスや垂木といった構造を意匠としてあらわしている。第開口を得るために引戸やガラス戸を柱芯から外して持ち出す「芯外し」の手法を用いて、庭の延長としての居間を実現している。杉の縦板張りの外壁に地震を考慮して採用された鉄板葺きの屋根と深い軒が水平に走って、建物に陰影を与えている。
日本をこよなく愛したレーモンドが大切にした、人間的なスケールと自然との一体性を体感できる建築である。備え付けの家具はノエミ夫人の作品。「笄町の自邸」が取り壊された現在、70年を経ても建築当時の姿を今に伝える井上邸は、レーモンド建築の真髄を伝える貴重な作品といえる。

北側外観。「芯外し」の手法で連なる居間のトップサイドライトが印象的な外観となっている。写真右が、パティオへとつながる玄関である。

三方を「芯外し」の連窓とした居間南側。建具を開放することで庭園と居間が一体となる。網戸は無い。深い軒が落ち着いた室内空間をつくっている。

居間には暖炉があり、ノエミ夫人のデザインによる家具が置かれている。壁はラワン・ロータリーベニヤ貼。北側には障子のトップサイドライトを設置。天井部分中央のダクトはセントラルヒーティング。

寝室南側。左側の窓はパティオに面している。家具は、笄町の自邸と同形。ソファベッドを２台配置（写真右）。

寝室（洋室）の隣に設けられた床の間をしつらえた小上がりの和室。照明器具はイサム・ノグチの作品。

玄関の正面に位置し、居間と寝室をつなぐパティオ。垂木上に線入りガラスが設置されている。

建物名称	旧井上房一郎邸
建築年	1952（昭和27）年
構造・様式	木造平屋建
所在地	群馬県高崎市八島町110-27（高崎市美術館内）
電話	027-324-6125
HP	https://www.city.takasaki.gunma.jp/docs/2014011000469/
開館時間	庭園　3月～11月：10:00～18:00、12月～2月：10:00～17:00（入園は30分前まで） 高崎市美術館の開館日に準ずる。邸内の公開時間はホームページで最新情報をご確認の上ご来館下さい。
アクセス	JR高崎駅より徒歩3分
備考	2010（平成22）年高崎市景観重要建造物第1号

旧山崎家別邸

きゅうやまざきけべってい

埼玉県川越市

旧山崎家別邸は、川越の老舗菓子店「亀屋」の五代目山崎嘉七の隠居所として大正14(1925）年に建てられた。設計は同じく川越で第八十五銀行（現在の埼玉りそな銀行、国登録有形文化財）を設計した建築家保岡勝也（1877-1942）が建物から造園まで手がけた。
保岡氏は東京帝国大学で辰野金吾教授に師事し、卒業後は三菱地所に在籍していたが住宅に関心を持ち独立。我が国の近代における住宅・数寄屋設計者として高い評価を受けた一人であり、和風庭園にも書籍を著すほど造詣が深かった。
主屋は和洋館並列型住宅で、洋館の白い窓と和漢の木建具がしっくり溶け合うデザインになっている、「川越の私的迎賓館」として皇族の宿泊所としても使われた。
敷地面積は約2,300㎡、延べ面積は約250㎡である。

【茶室】
茶室は主屋から庭を通して見る姿を重視しており、土庇部分を主屋側に向け、その上に片入母屋を付け妻を正面に見せている。

見どころ

左／天窓が付いた廊下　　右／網代天井の美しい縁側
モダンと伝統、和風と洋風の意匠をあわせ持つ建築である。

左／便所：デザインされた照明に照らされた天井
右／洗面台：当時の最先端であったレトロな設備機器が随所に見られる。各室の調度品も美しい。

階段踊り場のステンドグラスは大正期に活躍した小川三知（1867-1928）の「泰山木とブルージュ」という作品である。階段下のステンドグラスは鮮やかな色硝子と細かい線で区切られ、別府七郎作といわれている。

茶室内部のこだわりは全ての柱に丸太をそのまま使い、障子の框を丸太に合わせてひっかけているところである。床柱のみ栗のナグリ仕上げとなっている。

【主屋客間９畳】
数寄屋造りで、８畳の広さに下がり壁を介して北側に１畳加わった９畳の間である。柱は全て吉野杉磨丸太で長押にも杉磨丸太の割り材が使われている。

建物名称	旧山崎家別邸
建築年	1925（大正14）年
構造・様式	木造二階建
所在地	埼玉県川越市松江町2-7-8
電話	049-224-5940
HP	https://www.city.kawagoe.saitama.jp/welcome/kankospot/kurazukurizone/kyuyamazakike.html
開館時間	4～9月 9:30～18:30　10～3月 9:30～17:30
アクセス	西武新宿線「本川越駅」より徒歩15分
備考	市指定有形文化財　主屋・茶室・腰掛待合 国登録記念物（名勝地）庭園

二木屋（旧小林英三家住宅）

埼玉県さいたま市

にきや（きゅうこばやしえいぞうけじゅうたく）

中庭から南側外観を見る

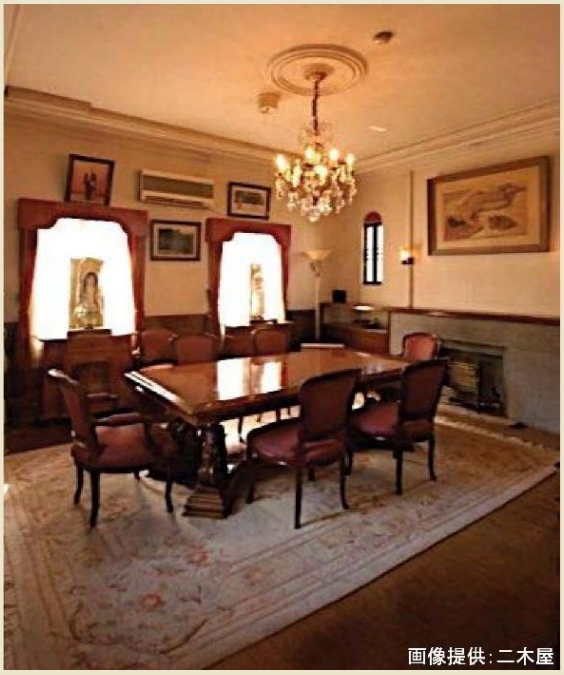
旧小林英三家住宅はもともと陸軍将校の別邸として建てられた住宅建築である。敷地の東側と北側の塀は、大谷石を６段に摘む重厚な塀で東面のほぼ中央に木製扉の門、脇に通用口がある。主屋が建てられた昭和10年代初期は付近が住宅地として開けた時期にあたり東京近郊の住宅地形成期の様子を今日に伝えている。

西側玄関アプローチ

実業家であり政治家であった小林は第３次鳩山内閣に厚生大臣として入閣した人物であった。本住宅は１階を洋間とする北西の２階建部分と東側の眼光部分はそれぞれ昭和23（1948）年、昭和25（1950）年に増築された。大勢の来客をもてなすため18畳と15畳の広間を持ち、現在は料亭二木屋として建物の公開を兼ねて活用され、四季折々の季節感溢れるお料理や、桃の節句、端午の節句の豪華な飾り付け目当てのお客さんで賑わっている。

見どころ

玄関脇の２階建増築部分の１階は、和風の外観から想像もつかない豪華なシャンデリアやマントルピースのある洋間である。窓は木製でアーチ状の可愛らしい小窓が設えてあり、南に向いている腰窓には組子をデザインに取り入れた和洋折衷の上品なディテールが目を引く。天井にはモールディングが施されており、厚地カーテンの装飾バランスの葡萄色と相まって、より落ち着きのあるクラシカルなインテリア空間になっている。



当時の趣を残し料亭に改修された主屋

昭和25（1950）年に増築された和室18畳・和室15畳続き間

建物名称	二木屋（旧小林英三家住宅）
建築年	1935（昭和10）年
構造・様式	木造平屋一部二階建
所在地	埼玉県さいたま市中央区大戸4-14-2
電話	048-825-4777
HP	http://www.nikiya.co.jp
開館時間	11:00～22:00
アクセス	京浜東北線・北浦和駅西口徒歩8分
備考	国登録有形文化財

遠山記念館

とおやまきねんかん

埼玉県比企郡川島町

遠山記念館は、日興證券（現ＳＭＢＣ日興証券）の創立者である遠山元一が、没落した生家を努力の末に立て直し、苦労をかけた母美以のために建てた邸宅で、工期は昭和8（1933）年～昭和11（1936）年、延べ床面積700㎡である。敷地内には、住居のほかに、茶室、待合い、長屋門等、全９棟から構成されている。設計は室岡惣七、工事の総監督は元一の実弟芳雄、施工は大工棟梁の中村清次郎が担当し、当時の卓越した建築技術をもちいて、全国各地を回って銘木を収集した、戦前における最高峰の近代和風建築の一つといえる。邸宅は、建築様式を異する東棟、中棟、西棟の３棟を廊下で結ぶ構成になっている。

【東棟外観】
千鳥破風の茅葺屋根、用材は欅、靴脱ぎ石の鞍馬石は圧巻である。

【中棟外観】
屋根は桟瓦に銅板葺、用材は檜、壁は卵漆喰と檜の下見張りである。

【西棟外観】
用材は北山杉の面皮付、壁は錆聚楽（蛍壁）、軒裏の瀟洒な細工も見逃せない。

見どころ

【中棟廊下】左上
豪華な化粧小舞天井を受ける丸桁は長さ７間の吉野杉。畳床が来客の足にやさしく庭の緑も手に取るように近く感じる。
【西棟廊下】右上
掛込み天井と半分畳が敷いてある床は数寄屋造りの導入部にふさわしい。
【中棟浴室】左
天井が放射状の唐傘天井で、驚くことに当初からボイラー給湯設備が施されていた。

【西棟和室７畳の間】
座敷と庭をつなぐ軒内間の土間に磚瓦を敷き詰め、内外を一体化する空間形成となっている。ずっと畳に腰掛けゆったり庭を眺めていたい。

【東棟居間】
18畳の居間は太い欅柱や挿し鴨居等、構造部材の強弱感や、囲炉裏、縁無しの坊主畳によって、豪農の趣きを醸し出している。

【中棟大広間】
18畳の大広間は天井高が10尺、伝統的な書院造りの床の間を背に３方に展開する庭の景色と共に来客をもてなす場所であった。

二階には応接室と寝室があるが、普段は非公開となっているため、一般開放する時を事前に調べて行くことをおすすめする。

【西棟和室8.5畳の間】
落ち着いた雰囲気の数寄屋造りは母のための空間であり、下がり壁や床脇の壁留め、無目鴨居の付け書院が絶妙なバランスを形成している。

建物名称	遠山記念館
建築年	1936（昭和11）年
構造・様式	木造二階建
所在地	埼玉県比企郡川島町白井沼675
電話	049-297-0007
HP	http://www.e-kinenkan.com
開館時間	10:00～16:30（入館は16:00まで）
アクセス	桶川駅、または川越駅よりバスで牛ヶ谷戸下車徒歩15分
備考	国指定重要文化財

旧田中家住宅

きゅうたなかけじゅうたく

埼玉県川口市

国道122号沿い旧田中家住宅正面入口

和館：庭園側　防空壕地下室入口あり

見どころ

旧田中家住宅は、煉瓦造３階建の洋館が大正10（1921）年に上棟し、大正12（1923）年に完成。昭和9（1934）年に和館を増築。他茶室、文庫蔵、煉瓦塀、池泉回遊式庭園により構成されています。和館は木造2階建の寄棟屋根を乗せた数寄屋造り。建設時期は、4代目徳兵衛が貴族院議員として政界にいた時期で、大勢の来賓を迎えて行事を行なうため増築したものと考えられます。味噌醸造業の他に材木商も営んでいたことから、最高級の木材を用い、煉瓦も近くの現場で焼かせるなど、地元職人たちの高い建築技術を表現した建物です。設計監督技師は櫻井忍夫。

東西に伸びる長方形のプラン。西側から仏間、次の間、座敷、手洗い場、袴脱、便所が配置されている。

廊下　押入引戸は屋久杉

1階縁側廊下

1階座敷吊り下げ多灯

玄関

帳場

金庫

屋久杉の天井

欄間：松林桂月の作品

昭和48（1973）年茶室を建築。一般利用可能（HP参照）

建物名称	旧田中家住宅
建築年	1923（大正12）年
構造・様式	洋館：煉瓦造+木造　和館：木造
所在地	埼玉県川口市末広1-7-2
電話	048-222-1061（川口市立文化財センター）
HP	https://tanakatei.jp
開館時間	9:30～16:30（入館は16:00）
アクセス	埼玉高速鉄道川口元郷駅下車2番出口より徒歩8分
備考	2006（平成18）年　国登録有形文化財 2018（平成30）年　国指定重要文化財

上花輪歴史館

かみはなわれきしかん

千葉県野田市

冠木門から門長屋を望む

寛文元（1661）年に醤油の醸造を始めた旧家で、上花輪の名主を務めてきた高梨兵左衛門家が代々大切にしてきた住居、庭園、土蔵、屋敷林、神楽殿等、歴史的価値の高い建造物が丁寧に保存されている。邸内には明和3（1776）年建設の門長屋から、昭和6（1931）年建設の京風数寄屋建築の主屋にいたるまでの、様々な時代の建物が混在しているが、みごとに調和が保たれている。
高梨家は代々、建築や造園に造詣が深く「西に森、木谷山」という江戸時代の屋敷建築の基本を忠実に守り続けてきた。28代兵左衛門が主屋を改築した際にも、最新設備をとり入れたり、京都の鞍馬石を敷石にするなどの巧みな改修で、調和を保ち続けてきた。
建物裏手には構堀（かまえぼり）が巡り、船着き場が設けられている。いにしえの奥様やお嬢様が、ここから船に乗り江戸に簪を買いに出かけて行ったという。そんな姿が思い浮かび、タイムスリップができる歴史館である。

表玄関

見どころ

最大の見どころは、主屋内の見学コース。学芸員の方が一つ一つの部屋を詳しく説明をしてくださる。その後、副館長である高梨節子さんが点ててくださるお茶をいただきながら話を聞く、節子さんが高梨家へ嫁いでこられた時、土蔵にはおびただしい数の先祖伝来の貴重な文物などがあった。こうした文化財にたいへん興味を持ち、家事のかたわら学芸員の資格を取得し勉強をしてきた、という経歴の持ち主。これらの文化財を後世に残したいと博物館の構想を持ち、全収蔵品の目録を作成し、醸造用具や生活用具、屋敷全体を見学できる「上花輪歴史館」を平成6（1994）年4月にオープンした。
「先祖の強い美意識で建てられ、魂のこもった庭園と建物を慈しんで残していきたい。先祖への尊敬の念をもって、生活に根ざした文化を紹介し、歴史を感じとってもらいたい。また、忘れられていく日本の美意識、伝統美、建築空間の美を体験してもらいたい」と、見学者一人一人にお茶を点てて接してくださる。明和3（1766）年に建てられた門長屋をくぐり、文化3（1806）年の書院を経て、昭和6（1931）年建設の数寄屋造り棟でお茶をいただくと、250年の時の流れと共に高梨家に受け継がれる美意識を体感できるに違いない。
内部の写真は、防犯等の観点から公にされていないが、各部屋には各時代の当時の生活が再現され、小物がそのまま飾られている。直接足を運んでこそ体験できる見学コースである。

書院へ続く鞍馬石の敷石

神楽殿

夏の間、障子から模様替えする夏障子

建物名称	公益財団法人 高梨本家　上花輪歴史館
建築年	1766（明和3）年、1931（昭和6）年など
構造・様式	木造平屋建　数寄屋造
所在地	千葉県野田市上花輪507
電話	04-7122-2070
HP	http://kamihanawa.jp/
開館時間	3月・10月・11月・12月第1週：10:00～16:00 4～7月・9月：10:00～17:00 休館日：月曜・火曜・8月・12月第2週～2月 ※主屋内の内覧コースは事前予約。 金曜・土曜の10:15～、11:30～、13:00～
アクセス	東武野田線野田市駅下車 徒歩17分、駐車場有
備考	国県指定名勝「高梨氏庭園」 近代化産業遺産「野田市の醸造関連遺産」

戸定邸

とじょうてい

千葉県松戸市

表座敷棟：庭園から望む。芝の形・高さ、樹木の種類、東屋等が当時の写真を元に復元された。　©松戸市　戸定歴史館

江戸幕府最後の将軍・徳川慶喜の弟・昭武の私邸で、西に江戸川と富士山を望む見晴らしの良い戸定が丘の大地に所在する。明治17（1884）年竣工。後の増築を経て現在９棟が廊下で結ばれ部屋数は23を数える。江戸時代の大名屋敷の系譜上にありながら、徳川家が権力の座を離れたため、生活様式が大きく変化し規模は著しく縮小している。最上等の杉材をふんだんに使う一方で、装飾を最小限に留めた空間には静かな気品が漂う。昭武は7年間に及ぶ欧州滞在の経験から、芝を敷き詰め円錐樹形の木立を配置した洋風庭園を築き、伝統的な和風様式を用いた主屋との調和に心血を注いだ。明治前期における上流住宅の様態の指標となるものとして歴史的価値が高いといわれる。４千坪を超える庭園と併せて楽しんでほしい。

使者の間棟の欄間：中国故事の縁起をかついで蝙蝠の型で抜いてある

使者の間棟の押入：下段は貴重なケヤキの一枚板。明り取りの工夫もされている

見どころ

松戸は水戸街道の宿場町として栄えた経緯もあり、元水戸藩主であった昭武には馴染み深い場所である。主屋を取り囲むよう庭が配され、昭武が好んだヒヨクヒバやコウヤマキなど大木が植えられている。他には付属建築（茅葺門・物置）が残る。中・奥座敷棟は夫妻や家族の生活の場とし、増築された離座敷棟は生母秋庭が住んだ。建物は大規模だが華美な装飾はなく、一見質素である。しかし様々な工夫（台所棟の廊下幅を広くし使い勝手を考慮、出窓の出を大きく等）が見受けられ、現代の住宅にも十分に応用できよう。

棚は高さがある

表座敷棟の客間

飴色に光る長い丸桁が建物外周を囲み、大工の技量の高さが伺える

表座敷の客間からの眺め

茅葺門・玄関：昭武存命時には腕木を支える鉄材が設置されていた

台所と中座敷を繋ぐ廊下の出窓は奥行きがあり、膳の仮置きができた

湯殿棟の網代天井：湯気の逃げ道にもなっている。邸宅内で一番凝った天井かもしれない

平面図　©松戸市 戸定歴史館

建物名称	戸定邸・戸定邸庭園
建築年	1884（明治17）年
構造・様式	木造平屋建　一部二階建　寄棟造　桟瓦葺一部銅板葺
所在地	千葉県松戸市松戸714-1
電話	047-362-2050
HP	https://www.city.matsudo.chiba.jp/tojo/
開館時間	9:30～17:00（入館は16:30まで） 休館日：月曜日（祝日の場合は火曜日） 年末年始（12/28～1/4）
アクセス	ＪＲ常磐線　松戸駅東口下車　徒歩10分　駐車場有
備考	国指定重要文化財・国指定名勝

旧堀田邸

きゅうほったてい

千葉県佐倉市

玄関棟：主人もしくは賓客を出迎える

最後の佐倉藩主・堀田正倫の邸宅で、明治23（1890）年に竣工。現在は佐倉厚生園の敷地内に存する。明治43（1910）年には湯殿が増築され、主屋や門番所、土蔵などの建物と庭園で構成されている。主屋は木造平屋建て一部２階建て５棟からなる。現存する明治時代の木造邸宅として貴重なものであり、建物群は平成18（2006）年に国の重要文化財に指定されている。庭園も当時の姿や変遷が史料として残されており、それらが評価され平成27（2015）年国の名勝に指定された。正倫公は農業と教育の発展に尽力し、県に先駆けて堀田家農業試験場を明治30（1897）年に設立。当時の佐倉中（現佐倉高校）へ多額の寄付もした。建物群と庭園の取り合わせの美しさに往時を偲ぶことができる。

庭園は入念な手入れがされており、何処から見ても美しいが客座敷からの眺めは格別である。

見どころ

主屋は身分や格式を意識した造りとなっていて、出入口も当時は５つあり使い分けされた。更に部屋ごとに建具・柱の材種・壁材料等、厳格な区分けがされた。家族の生活空間である居間棟・書斎棟の造りは細やかな工夫が凝らされ、七宝焼の引き手・明治時代の女流画家、跡見花蹊の絵が引き戸に用いられている。書斎棟は当主正倫公の専用スペースで柱はおろか障子桟まで手の当たるところは全て面取りされている、ぜひ間近で見て欲しい細やかな意匠である。天井には当時も珍しい印度更紗が張られている。豪奢ではないが、旧大名家の邸宅らしい凛とした美しさが感じられる。年数回、特別公開をしている。一般公開では見られない棟があるので訪れる際には確認をして頂きたい。

書斎棟
格式高い書斎棟は紫檀の床柱。
印度更紗張りの天井が印象深い

広い庭も魅力のひとつ

書斎棟・２階は通常は非公開

玄関棟の畳廊下：家令の執務室が並ぶ

客座敷の床の間：床柱の材種は檜

湿気の溜まる北側の床下に通気口。
寝室の畳下地は通常より厚い24㎜。
東日本大震災でも目立つ被害はなかった

居間棟と書斎棟を繋ぐ廊下：網代天井が美しい

建物名称	旧堀田邸・さくら庭園
建築年	1890（明治23）年
構造・様式	木造平屋建　一部二階建　寄棟造 桟瓦葺一部銅板葺
所在地	千葉県佐倉市鏑木町274
電話	043-483-2390
HP	http://www.city.sakura.lg.jp/0000000627.html
開館時間	9:30～16:30（入館は16:00まで） 休館日：月曜日（祝日の場合は火曜日） 年末年始（12/28～1/4）
アクセス	ＪＲ佐倉駅又は京成佐倉駅 下車　徒歩20分　駐車場有
備考	国指定重要文化財・国指定名勝 入館料一般350円 学生170円

翠州亭（旧スイス大使館）

千葉県長生郡

すいすてい（きゅうすいすたいしかん）

正面外観

「旧スイス大使館建物」は、昭和5（1930）年日本郵船株式会社の創始者近藤兼平氏の後嗣、近藤滋弥（当時貴族院議員、男爵）の別邸として、伴仲信次氏の手により東京麻布広尾に建築された。氏24歳の時の力作である。近藤男爵は茶道を嗜む茶人であり、全室京間取りで、数寄屋風総檜造り、随所に繊細な造形がみられる。日本建築の粋と高い評価を受けている。

南面外観つつじ園から

見どころ

建物の前面には約2000株のツツジ、その他、600本の梅林、60本の桜が植えられており、まずは外から四季折々の屋敷の佇まいが楽しめる。食事は予約が必要だが、ゆっくりと房総の海、山の幸を堪能していると、時は瞬く間に過ぎてしまう。お客様の帰った部屋は快く見学させてくださる。建物好き、おいしい物好きを十分満足させてくれる。

内部の設えも随所に見どころがある。各部屋を結ぶ内廊下は、高さの違う欄間が設えてあり、遠近法による奥行を感じさせてくれる。また、濡れ縁には竹節欄間があり、格調の高さが感じられる。全室京間取りなので全体がゆったりと感じられ、鴨居の高さも６尺あり、大柄なスイスの方たちも使い勝手が良かったであろうと思われる。

夕暮れ時の枯山水

松の間外観 枯山水から

赤いモケット貼りの折上げ格天井

見事な屋久杉の船底天井

眺望も美しい鶴の間

開放感のある松の間

昭和20（1945）年～昭和53（1978）年までスイス連邦共和国大使館として使用され、その間、歴代スイス大使はこの建物の美しさのみならず、その文化財的価値に深い理解をよせ、原型を損なわないよう細心の配慮をほどこしてきたといわれる。大使館の新館工事にあたり、この建物は解体の運命にあったが、伴仲信次氏の尽力と当時のピエール・クエヌー大使の協力により、国際親善とスイスと日本の親しい交流のシンボルとして、昭和53（1978）年11月スイス連邦共和国より長柄「ふるさと村」に寄贈され移築された。

現在は体験型リゾート「リソルの森」内の料亭として使用されている。

スイス大使館との交流が伺える展示品

１階レストラン

建物名称	翠州亭（旧スイス大使館）
建築年	1930（昭和5）年
構造・様式	木造二階建一部平屋建・入母屋造・瓦葺
所在地	千葉県長生郡長柄町上野526-6
電話	0475-35-3333
HP	https://www.resol-no-mori.com/restaurants/suisu-tei/
開館時間	11:00～14:00、17:30～21:00
アクセス	ＪＲ外房線　誉田駅より無料送迎バス20分　駐車場有
備考	建造物：国登録有形文化財、写真：翠州亭

旧白洲邸 武相荘

東京都町田市

きゅうしらすてい ぶあいそう

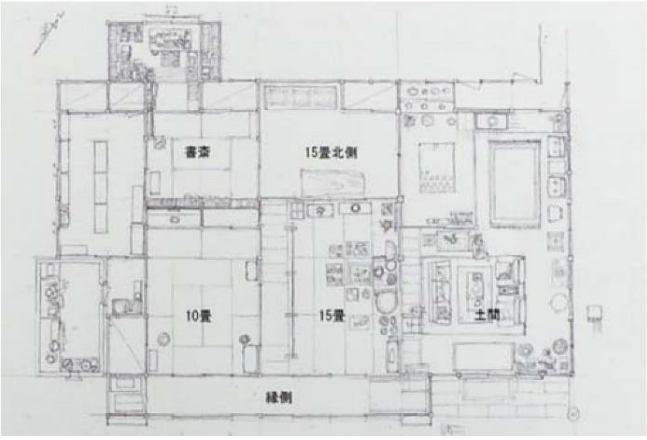
白洲次郎・正子が終戦前、1943（昭和18）年に農地付きの古い茅葺き農家を購入して移り住み、形作り、生涯を通して愛した家。寄せ棟造りの重厚な茅葺き屋根の母屋、柿やシラカシなどを配した広い庭をもつ佇まいで、当時の暮らしの様子をとどめながら、カフェ、レストラン、ミュージアムとして活用されている。

母屋外観　　正子書斎

見どころ

白洲正子が「田の字につくってある農家は、自由がきき、いくらでもいじくり廻せる、無駄のある家である」と書いた通り、既存を活かしながら、白洲夫妻の感性でインテリアを作り上げている。茅葺屋根のどっしりとした室内に、味わい深い家具や骨董が絶妙のバランスで配置されている。何ともいえない愛嬌ある使い方が施されていて、住み手のセンスが感じられる。

【土間】牛が住んでいた土間を、白いタイル貼り床の居間兼応接間に改修し、ボイラー焚き温水式床暖房を入れ、和と洋が融合した雰囲気を出している。千本格子戸や障子が空間をゆるく区切っている。既存の骨太な竿縁天井が、どっしりとした空間を造っている。土間から階段で上がる蚕室であった空間は、子供部屋として利用されていた。



建物名称	旧白洲邸 武相荘
建築年	不明
構造・様式	木造平屋建、寄棟造、茅葺
所在地	東京都町田市能ヶ谷7-3-2
電話	042－735-5732
HP	https://buaiso.com
開館時間	10:00～17:00（入館16:30まで）
休館日	月曜休館（祝日・振替休日は開館）
アクセス	小田急線　鶴川駅北口下車　徒歩15分

林芙美子記念館

はやしふみこきねんかん

東京都新宿区

左／アトリエ棟　右／生活棟

この建物は『放浪記』『浮雲』などの代表作で知られる作家林芙美子が、昭和16（1941）年から昭和26（1951）年にその生涯を閉じるまで住んでいた家である。芙美子は新居を建てるにあたり、建築について勉強をし、設計者や大工を連れて京都の民家を見学に行ったり、材木を見にいくなど、その思い入れは格別であった。山口文象設計によるこの家は、数寄屋造りのこまやかさが感じられる京風の特色と、芙美子らしい民家風のおおらかさをあわせもち、落ち着きのある住まいになっている。

茶の間

見どころ

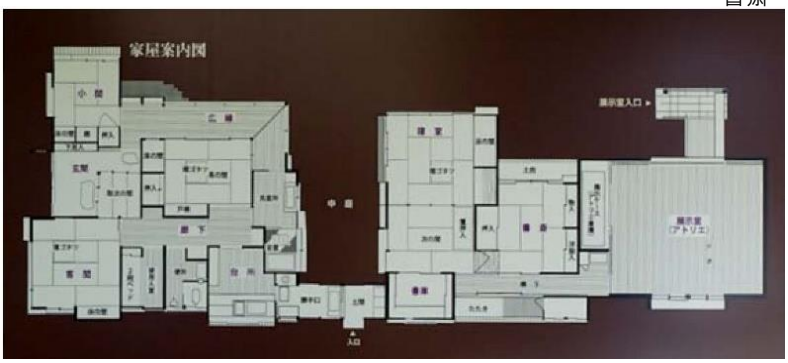
林芙美子のセンスの良さ、住まいについての真剣さが感じられる住宅であった。人に見せるための家ではなく、客間よりも茶の間と風呂と厠と台所にぜいを凝らしており、住み手のくらしと安らぎを第一に考えた家であった。終の棲家となったこの家には、創作活動と同様に生活を大切にした芙美子の熱い想いを随所に見ることができる。各部屋どこにいても庭との一体感を感じられ、風通しが良く、日本家屋の良さを感じられる。

【茶の間】茶の間掘りごたつ、釣り戸棚、二段押入れ、収納式神棚、多くの小引き出しなどを揃えたこの部屋は、暮らしやすさを考えた一家団らんの場であった。ちゃぶ台を囲んで一家が集まる時、芙美子の母は、常に右手床の間の床柱前に、大きな座布団を敷いて座ったそうだ。

【庭】芙美子の生存中、この庭一面に孟宗竹が植えられていた。没後、次第に竹は切られ、その面影は客間前の庭付近に見られるだけとなった。このほか寒椿、ざくろ、アルミア、おおさかづきもみじなど、芙美子が愛した木々がこの庭に植えられていた。現在は、カタクリ・サフランなど、四季折々の草花を楽しむこともできる。

【書斎】納戸として作られたこの部屋は、しばらくすると、書斎として使われるようになった。しかし、深い土庇、部屋の中から、半障子を通して廊下越しに北の小窓が見える様子など、納戸とは思えないような趣向も凝らされている。

書斎



建物名称	新宿区立 林芙美子記念館
建築年	1941（昭和16）年
構造・様式	木造平屋
所在地	東京都新宿区中井2-20-1
電話	03-5996-9207
HP	https://www.regasu-shinjuku.or.jp/rekihaku/fumiko/
開館時間	10:00～16:30（入館は16:00まで）
休館日	月曜日（祝日の場合は翌日）年末年始（12/29～1/3）
アクセス	都営地下鉄大江戸線・西武新宿線「中井駅」徒歩7分
備考	通常は外から見学。内部特別公開についてはＨＰ参照

旧猪股邸

きゅういのまたてい

東京都世田谷区

正門

吉田五十八の設計による武家屋敷の趣きをもつ数寄屋で、やや太めの木割りで質実剛健な表現がなされている。延面積約100坪の平屋で、屋根の納まりや採光、通風が考えられた二つの中庭が配されている。内部では、柱や長押、天井の廻り縁といった部材をできる限り取り除いた、すっきりとした吉田流と言われる近代数寄屋の特徴が随所に見られる。施工は水澤工務店、丸富工務店である。邸内には多くの樹木やスギゴケが植えられ、一部に水路が配されて、その廻りに園路を巡らせた回遊式の日本庭園が展開する。

出典：「近代建築の楽しみ」

見どころ

正門、玄関、主屋、茶室の重なり合う屋根の構成が外観を印象づけている。内外とも壁の仕上げはほとんど京聚楽壁で、柱や造作は赤松である。屋根の架け方、開口部の工夫などに、吉田建築の特徴がよくあらわれている。居間の窓から見ると離れのように見える茶室は、45度に曲げられた渡り廊下でつながっている。書斎ともう一つの茶室は1982（昭和57）年の増築である。

【居間】庭に面する開口部は全て木製の造作で、開け放つと庭と一体になるように、壁の中に窓一式を引き込むことができる。室内の建具も壁の中に入る引き込み戸が多用されている。荒い組子の障子、椅子座に配慮した床の間風の飾り棚、フラットな天井と照明など、吉田五十八好みと言われる作風が見られる。庭の反対側は中庭、食堂に続いている。

【和室】空調の吹き出し口は、細かい縦の格子で隠されている。床框（とこがまち）の細い隙間は空調の吸い込み口である。機械設備を和風デザインの中にさりげなく融合するのは吉田五十八の得意技のひとつ。

出典：住宅建築別冊 17「数寄屋造りの詳細 吉田五十八研究」

建物名称	旧猪股邸
建築年	1967（昭和42）年
構造・様式	木造平屋、数寄屋造り
所在地	東京都世田谷区成城5-12-19
電話	03-3789-6111（一財)世田谷トラストまちづくり
HP	http://www.setagayatm.or.jp/trust/map/pcp/
開館時間	9:30～16:30（月曜休館、詳細ＨＰ参照）
アクセス	小田急線「成城学園前」駅下車　徒歩7分
備考	

鶴翔閣（旧原家住宅）

神奈川県横浜市

かくしょうかく（きゅうはらけじゅうたく）

楽室棟前庭

1902（明治35）年に原三渓が自邸として建て、三渓園造成の足がかりとなった建築物である。広さ290坪に及ぶこの住宅は、主に楽室棟、茶の間棟、客間棟から構成され、外観の印象が「鶴」を思わせることから「鶴翔閣」と名づけられた。震災、戦災などをへて多くの改変がなされたが、1998（平成10）年から2000（平成12）年にかけて修復工事を行い、建築当初の姿に復元される。鶴翔閣には日本を代表する政治家や文学者が集い、横山大観、下村観山といった日本美術院の画家が創作活動のために滞在していたことで有名だ。

車寄せ玄関

石畳のスロープを上ると大きな車寄せがあり、その先の玄関の扉を潜ると土間の先に更に一段高い位置に床面が続く。これは、当時、この建物の前面には今のように背の高い樹木や植え込みなどはなく、部屋に座り大池を眺めたり、また立ってみると手前の睡蓮の池が眺められたりと、三渓の計算上の計画であったと言われている。
建物は芯々６尺の田舎間の計画になっており、棟毎に「楽室棟」「茶の間棟」「書斎」「仏間棟」「倉」「客間棟」で構成されている。「楽室棟」の鴨居の高さは６尺８寸（２m）を超え、客人をもてなす畳敷き部屋となっている。内部は「書斎棟」以外は簡素な造りとしている。
第２次大戦に突入する1940（昭和15）年ごろ、「楽室棟」では茅葺屋根から瓦屋根へ改修され、また軍の接収対策として建築面積の縮小が行われたが、現在では創建時の姿に戻され財団法人の管理となっている。

見どころ

由緒ある歴史を背景に現存する鶴翔閣は、現在「利用できる横浜市有形文化財」として活用することができる。大規模な日本間や広大な前庭を有し、茶会、句会などの日本的文化活動の場はもとより、国内外の賓客接遇、結婚披露宴、演奏会や展示会など、建物を五感で堪能することのできる建造物である。

楽室棟：三渓が画家たちを招き、自ら集めた古美術の名品コレクションを鑑賞し、論評しあった場所。鶴翔閣の中心的な棟となっているゆとりある空間で、現在では大きな会議やパーティなどの開催に対応している。

客間棟：三渓に招かれた画家たちは、滞在中この客間棟で多くの名作を生み出している。特に、横山大観「柳蔭」、前田青邨「御輿振」が描かれたのがこの場所で、歴史的にも貴重な場所である。

鶴翔閣と花菖蒲

建物名称	鶴翔閣（旧原家住宅）
建築年	1902（明治35）年、2000（平成12）年修復
構造・様式	木造平屋建・入母屋造/寄棟造・茅葺/柿葺/瓦葺
所在地	神奈川県横浜市中区本牧三之谷58-1
電話	045-621-0634
HP	http://www.sankeien.or.jp
開館時間	9:00～17:00（入園30分前）
アクセス	根岸駅からバス10分　本牧下車徒歩10分　駐車場有
備考	横浜市指定有形文化財　写真：三渓園保勝会

旧柳下邸

きゅうやなぎしたてい

神奈川県横浜市

旧柳下邸は明治～大正期の有力商人であった柳下氏により大正中頃に建設された。大正12（1923）年の関東大震災で一部倒壊したものの、大部分は損失を免れ、その後、戦争など激動の昭和史の中、柳下家の人々により大切に守り受け継がれていた。横浜市が平成8（1996）年に敷地を取得し建物の寄附を受け、できる限り創建当時の姿にと復元したものである。邸内では大正～昭和初期の暮らしの雰囲気が体験でき、また市民の文化活動の場として利用することもできる。

右：洋室（1F）
関東大震災後に上棟された２階建ての洋館は洋風の壁、天井、窓だが、何故か床だけが和風の畳敷きとなっている。当時としては珍しい洋間である。

旧柳下邸の邸内は、長い渡り廊下に、茶の間の堀りこたつ、柱時計、五右衛門風呂などがあり当時の暮らしぶりが伺える。細部には、欄間の優美な細工、天井の透かし彫り、明かり障子、ふすま引き手、照明の傘など各部屋毎に異なった意匠が見られる。
西館は、浴室・脱衣所・茶の間・居間などがあり、主に居室として使われ、中庭をはさんだ東館は、表玄関・客間・客用便所・仏間（茶室）など、接客用の場所とされていた。洋館は、関東大震災後の大正13（1924）年に上棟され、２階の洋室は書斎として使用していたとのこと。洋館の裏手には室内から繋がった蔵があり、中には当時使っていた冷蔵庫や蓄音機、足踏みオルガンなどが展示されている。

見どころ

建物は東館、西館、洋館、蔵から構成され、東館、西館の屋根は「むくり」をもたせた入母屋造りの瓦葺きで周辺の町並みからは突出した高さを持っていることから、近隣のランドマーク的存在となっている。東館は棟の向きが直交しているため、４つの入母屋屋根の複雑な構成になっており、洋館の屋根にはフランス瓦が葺かれていて、ドーマー窓、銅の棟飾りがついている。

左：廊下より中庭を望む
揺らぎのある大正ガラスを使用。
左下：浴室
鉄製の五右衛門風呂の底は熱いので、直接触れないように浮いている木の板を沈めながら湯船に入る。窓枠や天井のデザインが当時の雰囲気を残す。
下：客間１
縦繁の格子の書院窓、床の間の床板は、やに松（黒松）一枚板が使われ、客間らしい贅沢な造り。

建物名称	旧柳下邸
建築年	大正中頃
構造・様式	木造二階建、入母屋造、瓦葺
所在地	神奈川県横浜市磯子区下町10
電話	045-750-5022
HP	https://ne-yagishitatei.com
開館時間	9:30～16:30　第2・第4火曜・年末年始休館
アクセス	ＪＲ京浜東北線根岸駅から徒歩8分
備考	横浜市指定有形文化財

旧吉田茂邸

きゅうよしだしげるてい

神奈川県中郡大磯町

旧吉田茂邸は、戦後の内閣総理大臣を務めた吉田茂が暮らした邸宅を再建したもので、豪壮な数寄屋建築風の総檜造り建築物である。邸宅には吉田茂が昭和20（1945）年から昭和42（1967）年までの晩年を過ごしており、政界引退後も多くの政治家が「大磯参り」を行い、また国内外の要人が招かれるなど近代政治の表舞台としても利用されることとなる。

左：２階書斎　右：１階食堂ローズルーム

吉田茂没後売却され、大磯プリンスホテルの別館として利用されるが、平成16（2004）年頃より地元を中心に旧吉田茂邸の保存の機運が高まり神奈川県や大磯町により近代政治史の歴史文化遺産として保全の活動が始まる。しかし、平成21（2009）年3月本邸が火災で焼失してしまう。焼失を免れた日本庭園や歴史的資源や大磯丘陵に連なる貴重な緑地を保存活用するため、庭園と共に平成21（2009）年7月には都市計画の位置づけの元、再建の運びとなる。

見どころ

現在の建物は、吉田茂が暮らした当時の邸宅を復元したもので、昭和22（1947）年頃建てられた応接間棟、および昭和30年代に近代数寄屋建築で有名な吉田五十八が設計し、京都の宮大工により建設された。
吉田五十八の設計は、アール・デコの要素を取り入れた直線的な建物の外観や、モルタル塗り廻しの大壁といった近代的な素材を利用した和風建築、また内部も空間を広く見せるために部屋の柱をなるべく見せない造りとなっているなど、近代数寄屋建築と呼ばれる手法が随所にみられる。

昭和時代に増築が繰り返された遍歴を残す本邸。
複雑に屋根が連なる。

兜門：サンフランシスコ講和条約締結を記念して建てられた門で、軒先に曲線状の切り欠きがあり、兜の形に似ていることから「兜門」と呼ばれる。京都の裏千家の兜門と同じ製作者を京都から呼び寄せて造られ、昭和29（1954）年完成。屋根は「檜皮葺き」の伝統的技法が用いられており、消失を免れた貴重な建築物である。

日本庭園：日本庭園は、世界的作庭家中島健により設計され、また本邸周辺部分は、日本庭園研究家の久恒秀治によって造られた。吉田茂が良く散歩をしていたといわれる庭は、心字池や築山のある日本庭園、松林、バラ園、サンルームがある。日本庭園にはあまり用いられないカナリーヤシが植えられるなど、海外赴任生活の長かった吉田茂の嗜好の多様性、様式にとらわれない人間性が色濃く反映された庭園となっている。

左下：２階浴室　下：楓の間

建物名称	旧吉田茂邸（大磯町郷土資料館別館）
建築年	2017（平成29）年再建 1947（昭和22）年応接間棟、30年代新館等
構造・様式	木造２階建、瓦葺
所在地	神奈川県中郡大磯町西小磯418
電話	0463-61-4700
HP	http://www.town.oiso.kanagawa.jp/oisomuseum/
開館時間	9:00～16:30（入館16:00まで）月曜休館
アクセス	ＪＲ東海道線大磯駅　バス城山公園前より徒歩5分 駐車場有
備考	

鎌倉市吉屋信子記念館

神奈川県鎌倉市

かまくらしよしやのぶこきねんかん

趣のある門塀

庭側外観

作家吉屋信子が昭和10（1935）年に東京の自宅を吉田五十八に設計を依頼し建築した後、さらに昭和37（1962）年に鎌倉市長谷に「奈良の尼寺のように」と望み建てられた。ここで晩年を過ごし本人の意思で鎌倉市に寄贈された土地建物となっており、今も在りし日のままで保存されている。

見どころ

近代数寄屋建築の第一人者、吉田五十八による設計。施工は水澤工務店。
主屋に加え、前面通り沿いの屋根付きの伝統的な門と土塀も国の登録有形文化財。
茶室へ引き込まれるようなリズムのある露地の敷石、つくばいや四ツ目垣などの前庭空間。なだらかな平屋屋根の曲線、高床ですっきりした柱建て、庭と前庭の隔て。外構からゆっくり楽しみたい。玄関前のゆったりとした空間、敷瓦の腰掛付きの玄関。振り向くと額縁に切り取った前庭が現れるを確認して、奥に進む。少し狭くなった入口を通り抜けると明るい応接間に出る。白い天井にグレーのラインが映える。
縦横が大きい上に開口部側天井が傾斜しているから、窓に目をやると否が応でも天井が目に入る。斜線が走っており斬新なデザインはひきつけられてしまう。
応接間から1段高くなって和室がある。縁側続きの欄間は１間半を引き違い障子にしているがその引き違う箇所に、和室側から見えぬようスチールで釣ってあるのだ。天窓のような照明、額縁窓の書斎、間接照明の寝室など現代でも活用する手法がみられ応用を考える際の糸口をくれるかもしれない。

アプローチの敷石とつくばい

深い軒で迎える玄関

広縁と和室

庭と一体となる和室の構成

玄関

内玄関

応接間の天井

応接間ソファー

書斎

寝室

和室床の間

グループ学習施設としての活用にて運用。見学は下記範囲にて可となっている。（予約・利用期間、申請方法は鎌倉生涯学習センター）

建物名称	鎌倉市吉屋信子記念館
建築年	1962（昭和37）年
構造・様式	木造平屋建
所在地	神奈川県鎌倉市長谷1-3-6
電話	鎌倉生涯学習センター　0467-25-2030
HP	https://www.city.kamakura.kanagawa.jp/gakusyuc/yoshiya-koukai.html
開館時間	5～11月土日曜、11/1～11/3、GW、10:00～15:45
アクセス	JR「鎌倉」駅から京浜急行バス又は江ノ電バスにて長谷東町下車徒歩2分 江ノ島電鉄「由比ガ浜」駅徒歩7分
備考	国登録有形文化財

山口家住宅（雨岳文庫）

神奈川県伊勢原市

やまぐちけじゅうたく（うがくぶんこ）

正面外観

外観正面から斜に見える妻面に社寺のような懸魚を施す片入母屋屋根、もとは茅葺きで現在は鉄板葺き。表面をコールタール塗としている。正面の式台の軒は支輪をイメージさせる曲線の垂木として格式の高さを感じさせる。

見どころ

梁間6間・桁行11間、１階は田舎間の部分と奥座敷、２階は数寄屋風座敷の構成。
広いドマを見上げると太くて高い梁組に圧倒される。
チャノマは欅の一枚板の板戸と障子、箱階段と脇の階段障子、書院座敷、一見質素で武家屋敷風とされる奥座敷も宮様のお泊り部屋としての拘りを発見できて楽しい。
2階の数寄屋風書院座敷の組子障子のデザインは美しく床板框に螺鈿をあしらってある。柱の節の埋木模様や天井一枚板・漆塗、障壁画やホトケサンの天女の欄間彫刻や組み物の意匠もじっくりと観たい。

後世の改修の応用として、壁の貫穴を利用した電話配線の紹介など、解説も多く民俗的な展示も興味深い。
このように、１棟でいろいろな姿を見せてくれる民家はそうないのではないだろうか。
また敷地奥に、元政治家（政友会総裁）の鈴木喜三郎の別荘があり、関東大震災跡の大正12（1923）年築とされ、質素な外観に見えて内部は貴重な材を使用しているという。併せて訪れてみたい。

旧大山参道沿いにあり伊勢原に春を告げる美しい梅園として市民から愛される梅園でもあり、収穫された梅とともに大山詣の参拝客の立ち寄り先にもなっている。

山口家は江戸時代天和年間頃には上粕屋村の旗本間部領にあって間部家に仕える名主であった。建物は江戸末期天保5（1834）年頃建築と伝えるが1860年頃間部氏より代官の命を受け、元の住宅を曳き家して石倉から現在地へ明治初めに移築完了、その際に武家屋敷風に改装したと伝える。が、移築後まもなく明治時代を迎えたため、代官所としての使用は実質２年ほどであり、山口家の住宅と相州西部の自由民権運動の「湘南講学会」の会場となったことで自由民権運動に関する資料を蔵書として多く所有している。また前面敷地には前当主が寄進した大山阿夫利神社の参道第二鳥居が立ち、大山参りの観光客も訪れるルートとなっている。

妻面の懸魚

式台の軒・二重垂木

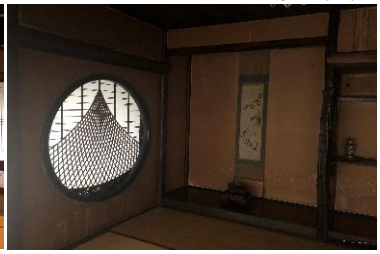
土間の梁組

チャノマ

座敷の襖絵

座敷の襖絵

2階座敷の組子障子



2階座敷構え

雨岳文庫とは、旧相模国大住郡上粕屋村にある幕末最後の代官屋敷であった国の登録有形文化財である山口家住宅と同家に伝わる２万点に及ぶ古文書・古美術品・什器を含むすべての文化財を指す総称として呼ばれている。それら資料の一部は敷地内の資料館で公開されている

８代佐七郎氏は明治14（1881）年に相模国最初かつ最大の自由民権結社「湘南社」の社長となり明治23（1890）年には第1回の衆議院議員に選出された人物であり、「雨岳」は佐七郎の雅号で,雨降山である大山のことを指すという。

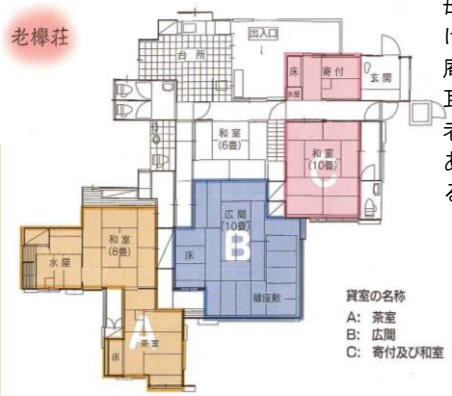
建物名称	山口家住宅（雨岳文庫）
建築年	1834（天保5）年頃
構造・様式	木造２階建
所在地	神奈川県伊勢原市上粕屋862-1
電話	0463-95-0002
HP	https://ugakubunko.org/ohp/
開館時間	原則として毎週日曜、10:00～15:00入場
アクセス	小田急線「伊勢原」駅北口から京浜急行バス「大山ケーブル行」バスにて「〆引」下車徒歩2分又は東名道高速バス「東名伊勢原」バス停下車徒歩3分
備考	国登録有形文化財

松永記念館 老欅荘

まつながきねんかん ろうきょそう

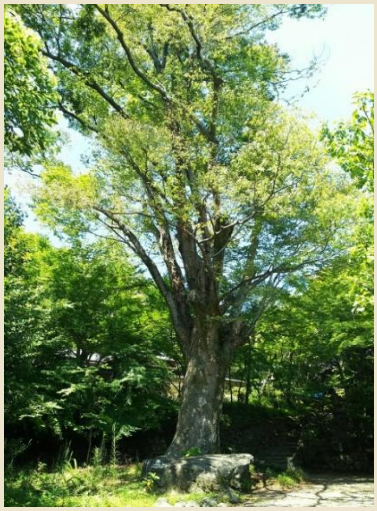
神奈川県小田原市

戦前・戦後を通じて電力事業を幅広く手掛け「電力王」とも「電力の鬼」とも呼ばれ、実業界で活躍する一方で、茶道にも造詣の深かった松永安左ヱ門(耳庵)が、小田原に居住してから収集した古美術品を一般に公開して広く愛好家に親しんでもらおうと、昭和34（1959）年に財団法人松永記念館を設立自宅敷地内に建てた。
この敷地内にある安左ヱ門の自宅が、老欅荘である。
安左ヱ門は、60歳を境に茶を趣味とするようになり「耳庵」と号した。「耳庵」の名は、『論語』の「五十にして天命を知り、六十にして耳に順う」から付けた。安左ヱ門は、昭和21（1946）年に現在の埼玉県所沢市から ここに移る。当初、15坪ほどであった新居は、その後増築が重ねられ現在の姿になった。老欅荘の名は、現在もそびえたつ大きなケヤキにちなんで名づけられた。
老欅荘では政財界の重鎮を招いた茶会が開かれると共に、時間が空くと小田原やその周辺の人々が招かれる茶会が開かれた。現在も茶室としての貸し出している。四畳半台目の茶室や三畳大の床の間を設けた広間、母屋に取りつく三畳の客付などの意匠に数寄屋建築としての特徴が見受けられる。小田原市内に残る数少ない数寄屋建築であり、茶室「葉雨庵」と共に平成12（2000）年9月26日付国登録有形文化財に登録された耳庵は最後の数寄茶人とも呼ばれ、我が国を代表する近代三茶人の一人。老欅荘は、安左ヱ門の固いイメージからは想像できない自由で遊び心のある納まりは、既成観念に捕らわれない安左ヱ門の生き方そのものである。



見どころ

- 欅側の湾曲塀
- 自由な発想の茶室
- 細やかなディテール



←現在も健在の欅
（老欅荘の塀の外側）

玄関のデザイン　→
平安時代の帽子を被った女性の頭のイメージ。

↙ 南側塀(欅側)のみ
湾曲している

湾曲させる事で
庭を広く見せる
手法。

しかし、縁座敷より
眺めてみると
湾曲する事によって
欅が庭に入り込んで
くる様。

また、そこだけを見
ていると　水盤に欅
があるように見える。

出窓のある茶室↑→

一本溝の引違障子↓

飾り窓と棚、天井に注目↓

建物名称	松永記念館 老欅荘
建築年	1946（昭和21）年
構造・様式	木造平屋、瓦葺き
所在地	神奈川県小田原市板橋941-1
電話	0465-22-3635
HP	http://www.city.odawara.kanagawa.jp/field/lifelong/property/tourokubunkazai/kenzoubutsu/tourokumatsunagaroukyo.html
開館時間	09:00 ～ 17:00（入館 16:30 まで）
アクセス	箱根登山鉄道「箱根板橋駅」下車徒歩10分　P有
備考	国登録有形文化財

白雲洞茶苑白雲洞

はくうんどうちゃえんはくうんどう

神奈川県足柄下郡箱根町

外観

箱根強羅の巨岩怪石の間に、深山のおもむきを保存して、見るからに山家の風情の濃い茶室群である。 大正時代のはじめ、利休以来の茶人と称された鈍翁・益田孝(三井コンツェルンの設立者で男爵)によってはじめられた。大正11（1922)年、この茶苑は三渓・原富太郎(横浜の富豪で美術品収集家として著名)に譲られ、三渓はあらたに対字斎を増築昭和15（1940）年、茶苑は再び原家より耳庵松永安左衛門(電力界の重鎮、松永コレクション創設者)に贈られ、こうして茶室は、明治・大正・昭和と３つの時代を代表する３人の茶人の間に伝えられてきた。今は旧跡として見学できる（国の有形文化財登録）。

見どころ

三井物産総帥であり数寄屋茶人として知られる鈍翁・益田孝が営んだ茶室の一つ。
囲炉裏に自在鉤を掛け自然な曲がり梁で構造を現し縁側を設けた田舎風の茶室である。益田孝が好んで多数作ったとされるがほかに現存せず貴重な遺構である。
6畳に手前座を付した主室、４畳の次の間、水屋などで構成される。主室は囲炉裏に縁なし畳という異例の構えとする。寄棟造、茅葺きで田舎風の外観と古材を多用した内部で野趣あふれる意匠となっている。

内部の迫力ある曲がり梁

貫通した曲がり梁

梁の見える茶室内部

自由度の高い庭

床柱は松永耳庵時代のもので、奈良当麻寺で使われていた古材を利用しているという。内部は庭の雰囲気と相まって全く枠を外した自由な茶室の様子である。白雲洞では実際に点茶を味わうことができ、気軽に日本文化を体験できるまた敷地内には他に仰木魯堂による不染庵、三渓原富太郎の作った対字斎という２席の茶室がある。それぞれが一度に味わえて興味深いものとなっている。

囲炉裏と自在鉤

対字斎からの眺め

突き上げ窓

縁側

茅葺きの軒　正面に「白雲洞」の額

建物名称	白雲洞茶苑白雲洞
建築年	大正年間1916年頃
構造・様式	木造平屋建
所在地	神奈川県足柄下郡箱根町強羅1300-69 箱根強羅公園
電話	0460-82-2825　（9:00～17:00）
HP	https://www.hakone-tozan.co.jp/gorapark/map/tea/
開館時間	10:00～12:00、13:00～16:00
アクセス	箱根登山鉄道「強羅公園」駅から徒歩3分
備考	茶席ご観料　点茶付き（お菓子とも）700円 国有形文化財登録

萬翠楼 福住

ばんすいろう ふくずみ

神奈川県足柄下郡箱根町

外観　（木々に囲まれて全貌を望めない）

萬翠楼の外観

明治11（1878）年、福住家代10代目当主福住正兄氏により、伝統的な日本の建築に西洋建築の要素を取り入れた「萬翠楼」「金泉楼」の２棟の旅館を完成された創建当時の写真からは、２棟の白い瀟洒な擬洋風建築が早川のほとりに並び建ち箱根に訪れる人々の目を引いたであろうことが伺える。
この旅館には昭憲皇太后、有栖川宮熾仁親王、木戸孝允、伊藤博文、山内容堂、福沢諭吉など幕末から明治にかけて名を馳せた著名人たちが長逗留し、１棟貸しの形で１階は公の場、２階3階はプライベートの間として使われていた。
その後昭和棟の増築を経て、平成14（2002）年、日本で始めて現役旅館として「萬翠楼」と「金泉楼」が国の重要文化財建造物に指定された。
萬翠楼の入り口には防火戸として重厚な蔵戸が設置されており、中に入ると右手に矩形の螺旋階段が特徴的に存在する。
１階15号室は一番華やかな造りとなっており、48枚もの天井画、伊藤博文、三条実美の書などが飾られ、旅館の一室というより生きた美術館のようである。

萬翠楼１階15号室　天井画が美しい

螺旋階段上部の
木製メダリオン

見どころ

15号室の華やかな天井がに目を奪われがちだが、その隣室の屋久杉一枚板の欄間や天井板の木目の美しさに圧倒される。
また２階の広縁のむくり天井の竿縁、アーチ状の欄間畳縁の構成によるリズミカルな空間や、書院や欄間障子の桟の美しさ、 磨りガラスのモダンな模様など、どの部屋のどの部分にも趣向が凝らしてあり、長逗留客を楽しませる工夫がなされている。

２階の広縁

伊万里焼の照明台座

竹を縦に割った欄間障子の桟

無粋なコンセントを
隠した床の間の棚

唐草模様の落下防止と網戸も当時の
まま

１階と２階をつなぐ
矩形の螺旋階段

一粒で２度おいしい
照明

金泉楼入り口の蔵戸

創建当初は早川の流れを眺めながら箱根の景色を楽しんだと思われる広縁や客間だが、現在は木々が成長し、その姿をすっぽりと隠してしまい、外界から隔離され時空を超えた不思議な世界を味わうことができる。
時を超えてもなお、新鮮で斬新と思わせるデザインや創意工夫の数々を、後世の人々にも体験してほしい。

建物名称	萬翠楼 福住
建築年	1878（明治11）年
構造・様式	木造三階建
所在地	神奈川県足柄下郡箱根町湯本643
電話	0460-85-5531
HP	http://www.2923.co.jp
開館時間	チェックイン15:00　チェックアウト11:00
アクセス	箱根湯本駅より徒歩５分
備考	宿泊利用時、イベント時に見学可。（事前予約） 国重要文化財

一条恵観山荘

いちじょうえかんさんそう

神奈川県鎌倉市

一条恵観山荘の外観

江戸初期の1646（正保3）年頃、後陽成天皇の第九皇子であった一条恵観が京都西賀茂に別荘の離れとして建立。和歌や茶の湯、絵画などに造詣の深い一条恵観本人が設計に携わった茶室である。
1959（昭和34）年、山荘は庭石や枯山水とともに建築家堀口捨巳の手により鎌倉に移築され、1964（昭和39）年に国の重要文化財に指定される。
その後、1986（昭和61）年に現在の位置に再移築し、改修を経て2017（平成29）年に一般公開となった。
建物の外観は田舎屋風であるが、茅葺屋根でありながらシャープな稜線が印象的である。

屋根の稜線

見どころ

竹と黒竹の垂木と小舞竹の軒

共に移築された御幸門

ふすまの引手

絹織の大紋高麗縁

人形回しの絵が描かれた杉戸

障子の先の庭園
柱と畳の縁がずれているのも意匠のうち

建物は寛永文化が色濃く表現されており、同時期の建物の桂離宮、修学院離宮は恵観の親族によって建設されたものである。
数寄屋造りの内部は11の部屋で構成され、土間から南庇中の間に入ると、登録有形文化財に指定されている杉戸絵が迎えてくれる。
連続した大小5つの間は最奥の最も格式の高い「鎖の間」に続いている。建具の杉戸絵やふすまの引手、趣の異なる天井の設えなど、各々の部屋には細部にわたり繊細な意匠が施されていて、訪れる人の目を引いて離さない。
炉の暖気が袋棚の食器を温めたり天井裏をつたい、建物全体を温める仕組みなど、実用的にも優れた仕様が見られる。

鎖の間　天井は杉皮の網代

東四畳半の間

この建物の最大の魅力は庭に面した障子を開け放した時に訪れる。客人を内へ内へと秘めた世界へ誘う計算しつくされた意匠の室内から一転、その秘めた世界は一気に外へと開放される。
南庇六畳の間から見る庭は、赤松やつくばい、枯山水などが巧妙に計算された配置で構成されており、静かな佇まいにぴりっとした緊張感を感じさせる。あえて現わしている柱の右側と左側では、違う景色が楽しめるのも面白い。
鎌倉の原風景を残した滑川のせせらぎに耳を傾け、敷地内に併設されているカフェでゆっくりとした時間を味わえる。

建物名称	一条恵観山荘
建築年	1646年頃創建　1987（昭和62）年に現在地に移築
構造・様式	木造平屋建
所在地	神奈川県鎌倉市浄明寺5-1-10
電話	0467-35-7900
HP	http://ekan-sanso.jp
開館時間	10:00～16:00（最終入園15:30）
アクセス	鎌倉駅よりバス約10分「浄明寺」下車徒歩2分
備考	建物内見学は先着順要予約 開催日はＨＰに掲載　1,500円（入園料込み）

千世倭樓（※取材時呼称）

ちょうわろう

神奈川県小田原市

中央に鉤型入母屋屋根の書院から、右手の合掌造、左手の土蔵へアプローチする。向かいに鈴廣蒲鉾本店・かまぼこ博物館が所在。

見どころ

圧倒される土間空間の豪壮な梁組と吹抜

囲炉裏の間の自在鉤や火棚

合掌造の上階を座敷利用

伝統的な叉首組構造部分

再利用の階段親柱の埋木に店のレリーフデザイン

土蔵のアーチ窓デザイン

慶応元年創業の鈴廣蒲鉾が、由緒ある複数の民家を移築再生して2002（平成10）年にオープンさせた。千世倭楼とは、「千年の世にも続いていく、調和のとれた世の中の象徴たる建物であれ」との願いを込め、命名された。書院造の主屋を中心に、両翼に、土蔵、合掌造が連なる。

【主屋】もともと秋田県の山林王菊池家の書院を解体・移築したもので、新築時完成に20年余りかけたという。再生された囲炉裏端は、空間は光を抑えた演出で昔の囲炉裏の間空間を醸し出すのに成功している。建物の豪壮さ、内部の繊細さが印象的だが、金属製サッシなどを使わず木製建具を使用するなど、古き良き建物をただ活用するだけでなく元々利用された姿で残す、伝統を守りながら進化するというポリシーを感じる。

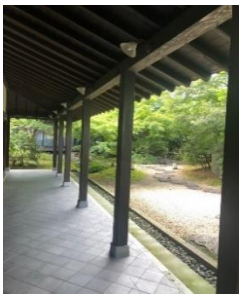
主屋の囲炉裏の間

土蔵の吹抜ホール

【土蔵】総漆塗りの土蔵は秋田県旧大森町からの移築で、江戸末期から明治期の山林王であった菊池家の蔵として使われていた。豊富で良質の部材をふんだんに使った雄大さと漆塗りの華麗さが共存する。組み込まれたアーチ窓が土蔵との相性の良さを醸し出し、食事処として洒落たイメージづくりとなっている。また庭と繋ぐ半戸外空間として四半敷瓦の土庇空間が贅沢な空間遣いとなっている。

【合掌造】江戸後期の富山県の合掌造を移築・再生した会席の食事処は民藝的デザインや小屋裏空間が秀逸。その他、かまぼこ博物館やギャラリー、引退した箱根登山鉄道「モハ1形107号」を利用したカフェなどが併設され、製造の見学を含め多様な楽しみ方ができる。

民藝風デザイン



土庇空間と庭

建物名称	千世倭樓　（主屋・土蔵・合掌造）（取材時）
建築年	江戸時代～明治初期
構造・様式	木造二階建、書院造・合掌造・土蔵造
所在地	神奈川県小田原市風祭245
電話	0465-22-3191（代）
HP	kamaboko.com
開館時間	10:00～17:00（詳細はお問合せください）
アクセス	JR・小田急線「小田原」駅タクシー約10分 箱根登山鉄道「風祭」駅直結、無料駐車場（300台）
備考	国登録有形文化財（主屋・土蔵）、見学は要予約

御師旧外川家住宅

山梨県富士吉田市

おしきゅうとがわけじゅうたく

中門から主屋を見る。奥行のある細長い形状の屋敷である。

昔から神様が宿る山と信じられていた富士山には、登拝するため各地から人々が訪れていた。御師（おし）とは寺社に所属し、参拝者の案内や世話をしたりする人を言うが、富士吉田の御師は富士山を神体として信仰するため、特定の寺社ではなく富士山へ信仰登山する人たちの世話や祈祷を行った。そのため「富士御師（ふじおし）」と呼ばれるようになり、富士御師は、その参拝者に自らの住居を宿坊として提供していた。その宿坊を「御師の家」と呼ぶ。

門柱、タツ道と呼ばれる細長い道、中門（なかもん）、ヤーナ川（間の川）、玄関へと進み、家の奥に御神殿がある。奥に行けば行くほど神聖な場所と考えられて、このような造りになっている。

家は奥行き八十間ほどの短冊形地割の敷地に建てられ、主屋と裏座敷の二棟から構成されている。

主屋は、18世紀後半の1768（明和5）年に建造された。上吉田に現存する御師住宅の多くは、19世紀以降の建築と推測され、この時期まで遡るものは少なく、極めて貴重な建造物といえる。

主屋の奥には、廊下を介して裏座敷が建てられている。屋根形式は切妻造・板葺（現・鉄板葺）で、規模は梁間四間半×桁行六間と主屋より大きい造りとなっている。裏屋敷は、主屋建立から約90年後の1860（万延元）年ごろに増築されて、改築や修理をくり返して現在に至っている。

見どころ

上段の間：裏座敷にある最も格の高い客室。北面に床の間があり、向かって右には、畳敷きの広縁に張り出した付書院がある。

上段の間

付書院

釘隠し：長押に釘隠しがあしらわれている。部屋ごと違うデザインの釘隠しがある。

主屋の式台玄関から座敷につながる

浴室の傘天井

裏座敷をめぐる縁側

建物名称	御師旧外川家住宅
建築年	1768（明和5）年
構造・様式	木造平屋建　切妻造
所在地	山梨県富士吉田市上吉田3-14-8
電話	0555-22-1101
HP	http://www.fy-museum.jp
開館時間	9:30～17:00（入館は16:30まで）
休館日	火曜日、祝日の翌日、年末年始
アクセス	富士急行線富士山駅から徒歩7分
備考	世界遺産富士山構成資産　国指定重要文化財

安藤家住宅

あんどうけじゅうたく

山梨県南アルプス市

入母屋造りの茅葺き屋根が印象的な主屋。右は中門。

安藤家住宅は甲府盆地南西部、釜無川と滝沢川に挟まれた水田地帯に位置する。敷地は約1300坪。約300年前の建物で、国の重要文化財に指定されている。
安藤家の先祖は武田家の家臣といわれ、武田氏滅亡後は一時徳川家に仕えたとされる。現在の甲府市の地に帰農し、母方の安藤の姓を名乗り、1708（宝永5）年に現在の地に居を構えていた。江戸時代は西南湖村の名主を務めた旧家で、現在まで一度も火災にあうことなく、往時のまま保存されている。主屋は大規模できわめて質がよく、しつらいも上品である。
中門から入ると式台のある玄関があり、主屋につながる。縁側のある奥座敷から広がる庭園には池や築山が配され、夏は涼を感じさせ、紅葉の時期もすばらしい桃の節句の時期には「ひなまつり」が開催され、江戸時代から近代までのひな人形約160体が展示される。

見どころ

【長屋門】
1782（天明2）年建造。もともとは武家屋敷を取り巻く家臣の住居である長屋と、門の屋根を一緒にしたもの。中央が出入口、左右が住居で、この家で働く人が住んでいた。

【主屋】
1708（宝永5）年建造。大戸口という引き戸から中に入ると土間があり、整然とした梁組が見られる。土間、式台付玄関のある玄関の間、中座敷、奥座敷、居間、祈祷室、納戸などから構成されている。

【中門】
中門は、式台付玄関に続く門。中門や式台付玄関は、当主と身分の高いお客様しか使用することがなかった。

【式台付玄関】
総ひのき造りの広い玄関。もともとは武家の正式な玄関で、武士の家には必ずあったが、普通の民家に作ることは許されなかった。村の役人をしているような家では、その家の家格を示すため、公の客を迎えいれるために設けられた。

【囲炉裏】
家族が集う大切な場所。毎日の食事の仕度をしたり、冬は暖をとる場所でもあった。火を焚くことによって出るススは、カヤ葺き屋根や柱の防腐剤となり、家の持ちをよくした。火の神様が宿ると信じられていた自在鉤も下げられている。

【奥座敷】
家の主人が客を迎える正式な場所。特別な客は、式台付玄関を上り、中座敷を通って直接この部屋に通された。広い日本庭園が望め、明るく風通しもよく、家の中で一番上等な部屋で、昔は主人以外の家族はめったに入ることがなかった。

【茶室】
1861（万延2）年の建造。茶を飲みながら、客をもてなす場所。茶室の床柱は榎木で、竹の子面という飾りが施されている。竹の子面とは榎木の下のほうを斜めに削り、竹の子のような木目を見ることが出来るようにしたもの。出ている年輪の数が多い方が価値があり、大工の腕の見せ所であった。

【市指定文化財　安藤家の避雷針の松】
樹齢351年を越える黒松。ここには明治期に取り付けられた避雷針があるので、「避雷針の松」と呼ばれている。

長屋門

中門

式台付玄関

囲炉裏

奥座敷

茶室

建物名称	安藤家住宅
建築年	1782（天明2）年
構造・様式	木造平屋建　入母屋造　茅葺
所在地	山梨県南アルプス市西南湖4302
電話	055-284-4448
HP	https://www.city.minami-alps.yamanashi.jp/sisetsu/shisetsu/bunkazai-ando/
開館時間	9:00～16:30（入館16:00まで）火曜休館
アクセス	中部横断自動車道南アルプスＩＣより車で10分
備考	国指定重要文化財

根津記念館

ねずきねんかん

山梨県山梨市

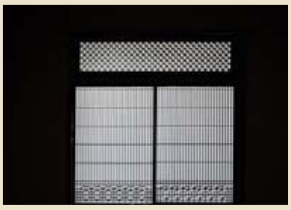
旧主屋

根津記念館は、「鉄道王」と称された実業家の初代根津嘉一郎の実家である根津家一族の屋敷を保存活用する施設。この屋敷は、嘉一郎関与の元、甥の根津啓吉により、昭和7（1932）年から10年にかけて整備され、平成15（2003）年に根津家の後継者より寄付を受け、山梨市が整備した。
記念館の敷地は約6700㎡、そこに国の登録有形文化財である長屋門、旧主屋、土蔵など昭和初期の建物と、保存されていた設計図書により平成18（2006）年に復原した数寄屋部分「青山荘」が建っている。それらすべてが近代和風建築である。

長屋門

見どころ

旧主屋と、16間巾(約29m)の壮大な長屋門は、起り屋根・漆喰壁で、梁に手斧(ちょうな)を使った名栗加工の細工がほどこされている。これらは、昭和8（1933）年に建築されたが、基礎は西洋式のRC布基礎である。旧主屋の台所の屋根には当初よりガラスの天窓があり、地下倉庫や両面使用のかまどなど機能的に考えられている。主人室の天井は高価な柾目板張りが使われている。欄間の障子は桟が斜めに細工されたり、他の障子にも細やかな細工が見られる。設備では、埋込の電気配線、風呂を沸かす際の熱を利用しつくったお湯をトイレの手洗いに引く工夫のあるボイラー設備、屋内消火栓など、各所に当時の先端的な技術が盛り込まれている。



青山荘の座敷

両面使用のかまど

旧主屋の台所

復原した青山荘

旧主屋妻面

土蔵(木造３階建)

蔵前

青山荘の南の日本庭園。作庭が趣味である嘉一郎は、御坂の山々とその上に顔を出す富士山を借景とし、飛石や池などに川石を多用して、故郷の自然を再現しようとした様子が伺える。また、東京・青山の自邸の大庭園は現在、根津美術館に受け継がれている。

建物名称	根津記念館
建築年	1933(昭和8)年
構造・様式	木造二階建　入母屋造　桟瓦葺
所在地	山梨県山梨市正徳寺296
電話	0553-21-8250
HP	http://www.city.yamanashi.yamanashi.jp/citizen/gover/public/park-spa/nezu-kinenkan/
開館時間	9:30～16:30（16:00受付終了）
休館日	月曜日、火曜日、年末年始
アクセス	中央本線山梨市駅より徒歩25分・タクシー5分
備考	国登録有形文化財「長屋門」「旧主屋」「土蔵」

伊那部宿 旧井澤家住宅

長野県伊那市

いなべじゅく きゅういさわけじゅうたく

かつて宿場町が栄えていた頃、中山道、東海道、甲州街道より伊那谷に物と文化とをもたらした伊那街道。この中間地点にあったのが、伊那部宿である。 この宿場の中で、高遠藩内でも屈指の豪農として知られ、代々造り酒屋を営んでいたのが井澤家だった。名高い井澤の屋敷は、宿場内で唯一の破風屋（大屋根・本棟造）であり、 建坪も最大。伊那部宿は天保年間に二度の大火に見舞われたが、井澤家は最南端に位置していたため、ただ一軒だけ焼失を免れた宿場町最古の建物である。

旧井澤家住宅外観

見どころ

江戸時代に建設された旧井澤家住宅は、1999（平成11）年に伊那市の有形文化財として指定され、2004（平成16）年に解体復元工事が行われた後、一般公開されている。

勝手(台所)周辺では、豪快な桁行、差鴨居、梁組などを見ることができる。古材の墨色が美しい館内には、かつて使われていた酒造道具や手形の類が展示され、見るのみならず、館内の和室を実際に使用できるようにもなっている。

囲炉裏のある勝手が建物の中心で、土間側の囲炉裏の縁が上框に接していて、下座のないのが特徴である。また、トオリには井戸があり、日常の生活用水として利用されていた。

トオリ～勝手

勝手～トオリ

【伊那街道・伊那部宿】

伊那市の中心部、官庁街裏手の天竜川右岸第二段丘と呼ばれる地形上に、伊那部宿がある。古来より東海道沿岸部と内陸の信濃を結び「塩の道」として知られる伊那街道は、戦国期に武田信玄によって中山道の脇往還、南信侵攻の為の軍用道路として基礎的な整備が行われ、江戸期に宿場町や伝馬制が設けられたが、飯田藩主の参勤交代以外はほとんど地元伊那地域の生活物流の道であった。

伊那部宿は飯田城下から塩尻宿までのちょうど中間地点にあり、ここから東へは高遠藩の城下町を経て甲州街道へ、西へは権兵衛峠(標高1521m)を越えて中山道木曽路へ通じる権兵衛街道があり、交通の要衝だった。

伊那部宿の始まりは江戸期より前の戦国期に、甲斐の武田信玄が南信への侵攻の為の前線基地をこの地に設けた事に由来している。その後江戸期に伊那街道が整備されると、伊那部宿には伝馬制が敷かれ旅籠や商家が立ち並んだ。町の南北にはそれぞれ桝形が設けられて外的の進入に備え、宿の北側には十王堂が立てられ魔除けとされていた。また宿の中央の長桂寺門前には高札場が置かれていた。本陣と問屋は東側に配され、道の中央には角川が流れていたと伝えられている。

伊那部宿の建物（町家）には門構えのあるものもあり、幕末に高遠藩へ多額の献金をし、門構えを許された名主の町家である。本来、江戸時代の宿場で門構えが許されていたのは本陣や脇本陣に限られていた。なお、伊那部宿の問屋の建物は現存していない。

伊那部宿の建物

建物名称	伊那部宿 旧井澤家住宅
建築年	江戸時代　2004(平成16)年解体復元工事
構造・様式	木造二階建
所在地	長野県伊那市西町5597-4
電話	0265-74-8102
開館時間	9:00～17:00(4月～10月)、 9:00～16:00(11月～3月)、火曜日休館
アクセス	JR飯田線　伊那市駅徒歩20分　駐車場あり
HP	http://www.inacity.jp/shisetsu/library_museum/kyuisawajutaku/isawajutaku_annai.html
備考	伊那市有形文化財

旧横田家住宅

きゅうよこたけじゅうたく

長野県長野市

この住宅は中級武士の武家屋敷で、他の藩士宅と同様に一種の公舎であった。旧松代藩士横田家は郡奉行などを務めていて、横田家が現在地に移った時期は18世紀末である。主屋は1794（寛政6）年、表門は1842（天保13）年に建てられた。隠居屋は1820（文政3）年ころ移築されたものと推定されている。

屋敷地は間口約40m、面積3340.82㎡、道に面して表門、奥に主屋、東隣に隠居屋、主屋南西に土蔵が建つ。松代の中級武家住宅の典型的な間取り、構成を残しており、1986（昭和61）年に国の重要文化財に指定された。長野市が保存・修景工事を行い、1992（平成4）年から一般公開されている。

横田家は「富岡日記」で知られる和田英をはじめ、幕末から明治・大正・昭和にかけ、最高裁判所長官、鉄道大臣など多くの人材を輩出した。

左／南の庭から見た主屋＊
中／西から見た主屋　下／座敷

見どころ

長屋門・一部２階建ての主屋・隠居屋・土蔵・遠山を借景とする庭園・菜園・庭に流れる泉水などを見ることができ、邸内の随所から、江戸時代の中級武士の暮らしぶりがうかがえる。当時の位置に屋敷地及び建物がほぼ完全に保存されている大変貴重な武家屋敷である。

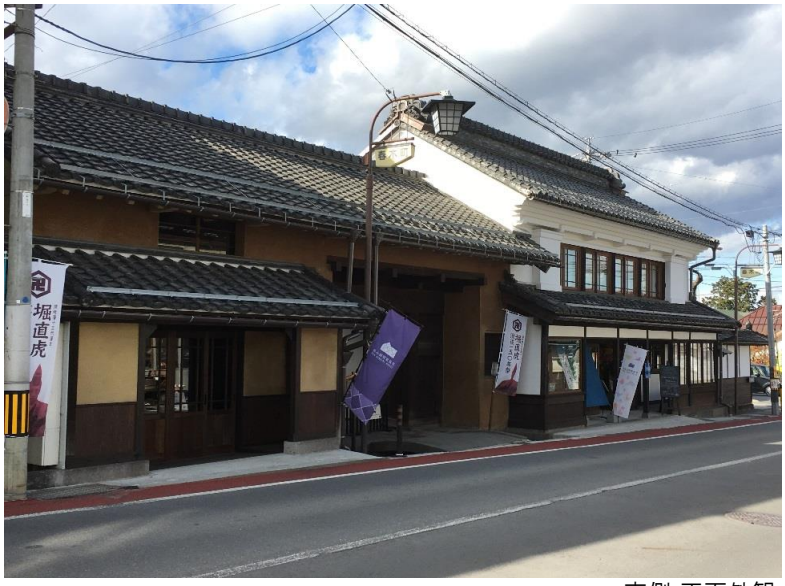
上／座敷の床の間＊
中左／主屋玄関＊
中右／箱階段＊
下／台所かまど＊

建物名称	旧横田家住宅（松代藩真田家家臣）
建築年	1794（寛政6）年
構造・様式	木造平屋建一部二階建
所在地	長野県長野市松代町松代1434-1
電話	026-278-2274
ＨＰ	http://www.sanadahoumotsukan.com/facility_detail.php?n=6
開館時間	9:00～17:00（入館16:30まで）4月～10月 9:00～16:30（入館16:00まで）11月～3月
アクセス	長野駅からバス30分、バス停より徒歩3分
備考	国指定重要文化財　写真＊：真田宝物館

旧小田切家住宅

きゅうおたぎりけじゅうたく

長野県須坂市



東側 正面外観

製糸業で栄えた須坂の歴史と当時の人々の暮らしを現代に伝える代表的な建物。1870（明治3）年の須坂騒動で打ち壊しにあい、その後毀損を免れた建物をもとに再興された。木造二階建て、屋根は北側が切妻造、南側が入母屋造、瓦葺である。塗り壁造の形式で、近世的な造りと近代的な造りが共存している。

主屋、長屋門、店、上店、土蔵が一体として残っている。長屋門には石橋が共に現存している。

北側 土蔵外観

見どころ

漆喰の鏝絵、瓦の役物に桃、ぼたもち石積み、庭には３種類の木が絡まりあった樹木や、はがきの樹とも呼ばれる“たらようの樹”がある。

上店を貸しスペースとして開放。奥の土蔵では長野県ゆかりの職人や芸術家の作品展を開催したり、組子細工作りなどのワークショップを開催するなど利活用の取り組みもある。

懸魚、鏝絵（米俵と小槌）

何面北座の仏壇

欄間の組子

欄間の組子

ぼたもち石積みの礎石

土蔵下屋部分の陶板

主屋奥座敷

奥座敷の書院

主屋茶の間から車寄せを見る

主屋座敷

中庭

水車（復元）

建物名称	旧小田切家住宅
建築年	1870(明治3)年以降
構造・様式	木造二階建　瓦葺　塗り壁造
所在地	長野県須坂市大字須坂423-1
電話	026-246-2220
HP	http://culture-suzaka.or.jp/otagiri/
開館時間	9:00～17:00(1～2月9:30～16:30) 木曜休館(除祝日)
アクセス	長野電鉄須坂駅から徒歩10分　駐車場有
備考	須坂市指定有形文化財

旧松本区裁判所庁舎

きゅうまつもとくさいばんしょちょうしゃ

長野県松本市

左右対称の外観。正面玄関を中央に構え、左右に法廷を備えている。

旧松本区裁判所庁舎は、明治41(1908)年に松本城二の丸御殿跡に建てられた。区裁判所は戦前の裁判所組織の名称で現在の簡易裁判所にあたる。旧松本区裁判所庁舎には、区裁判所の機能とともに長野地方裁判所松本支部の機能とも置かれ、建物内に区訟廷と支部訟廷の２つの法廷が設置されていた。
戦後、名称が長野地方裁判所松本支部・松本簡易裁判所に変わり、昭和52（1977）年に新庁舎に機能が移転するまで、約70年間裁判所として使われてきた。その後、市民による保存運動によりこの庁舎は現在後に移築復元され、日本司法博物館として保存活用された。現在は松本市立博物館分館の松本市歴史の里として整備され、他の歴史的建造物とともに公開されている。

見どころ

内外共にほぼ完全な形で現存する唯一の和風裁判所。建築史上極めて価値が高い建築である。
全国的に、明治時代に建築された公共建築は擬洋風が多かったが、各地の地方裁判所は和風を基本とすることが多かったようである。本庁舎は和風建築様式による裁判所建築の典型例で、その中でも完成度が高く、当時の技術を知るという意味でも高い価値を持つ。
木造平屋瓦葺で、平面形は左右対称で横長のＨ形をしており、その中央正面が突き出た形になっている。中央部分に中廊下をはさんで諸室を設け、左右の翼屋部には法廷が入っている。左右対称の安定した平面形をもつことで、これまで数々の地震や自然災害に耐えてきた。
平面には計5個の突出部があるが、それぞれの屋根に入母屋破風をつけ、また正面の屋根に2個、左右側面の屋根に各３個の千鳥破風をつけている。

和風の外観とレンガ造の塀の対比

当時の雰囲気が残る会議室

法廷：裁判官席として高い段が設けられている。格子天井が特徴的。

建物名称	旧松本区裁判所庁舎
建築年	1908（明治41）年
構造・様式	木造・平屋建、入母屋造、瓦葺
所在地	長野県松本市大字島立2196-1
電話	0263-47-4515
ＨＰ	http://matsu-haku.com/rekishinosato/
開館時間	9:00～17:00（入場は16:30まで、月曜休館）
アクセス	松本インターから車で3分 松本電鉄上高地線「大庭駅」より徒歩15分
備考	国指定重要文化財 写真：松本市立博物館分館歴史の里

山寺常山邸

やまでらじょうざんてい

長野県長野市

松代藩の寺社奉行、郡奉行を務めた山寺常山の武家屋敷が、かつてこの地にあったが、主屋等は大正時代までに失われ、その規模は不明である。しかし、江戸時代終わりから明治初期にかけて建てられたと推定される表門と、大正時代終わりから昭和初期にかけて建てられたと推定される書院が残され、修復・整備工事を経て2005（平成17）年から公開されている。

長屋門形式の表門は間口約22mで、松代城下に残る門のなかでは最大である。表門から渡り廊下で書院につながる。

象山を借景とした庭園には神田川の水を引き入れた池と、浄化の機能を経て下流の屋敷へと通じる水路（泉水）が残され、城下町のすぐれた水路整備の一端を見ることができる。現在の園池は大正時代に造られたものを再整備したものである。

左／塀に囲まれた書院と象山

見どころ

書院はその意匠性の高さから近代和風建築の秀作と評されている。１階座敷にかかる扁額から「萬竹庵」と命名されたことがうかがえる。表門よりやや高所に建てられ、背後にそびえる象山（竹山）との調和も意識した配置と見られる。

書院１階の茶室＊：丸窓と四角の窓が庭園の景色を切り取る。展望台のような部屋である。

書院１階の座敷＊：塀で囲まれた庭に面した落ち着いた座敷である。右に隣接する茶室と異なる景色がのぞめる。

長屋門形式の表門。背後の山が象山

左／庭園と庭＊　右／泉水路＊
観賞用の庭園とは異なり、城下町の泉水網を活かした、日常の暮らしと密着した生活の庭である。象山を借景にしている。

建物名称	山寺常山邸
建築年	表門：江戸時代末期、書院：昭和初期
構造・様式	木造平屋建一部二階建
所在地	長野県長野市松代町松代1493-1
電話	026-278-0260
HP	http://www.sanadahoumotsukan.com/facility_detail.php?n=8
開館時間	9:00～17:00（入館は16:30まで）4月～10月 9:00～16:30（入館は16:00まで）11月～3月
アクセス	ＪＲ長野駅よりバス30分、バス停より徒歩15分
備考	国登録記念物（名勝地）庭園　写真＊：真田宝物館

渡邉邸

わたなべてい

新潟県岩船郡関川村

渡邉邸外観

村上藩の郡奉行をつとめた渡邉儀右衛門善高が、寛文7(1667)年に下関の現在地に創建し、２度の火災を経て、現在の主屋は1817（文化14）年に再建された。母屋と土蔵６棟が国の重要文化財に指定され、庭園は国の名勝に指定されている。平成20（2008）年から６年をかけた大修理が終わり、往時の姿と工法を忠実に保存しながら再現され、豪農の風格を感じる見ごたえのある建物となっている。

母屋の通り土間

見どころ

外観で、まず目を引くのが石置木羽葺の屋根である。木羽葺の屋根に玉石を置く工法で、渡邉邸の屋根には約23万枚の木羽板と約15,000個の玉石が使われ、現存する建物の中では日本最大級の石置木羽葺屋根である。屋根の石は、度重なる大地震の際にも一度も落ちたことがない、「合格祈願石」でもある。また大座敷などの屋根はこけら葺で、通常の半分の間隔で杉薄板が重ねられ、優雅な曲線が美しい。

石置木羽葺屋根

こけら葺屋根

また、釘隠しや引手など、随所に凝った細工や工夫が施され、じっくり探してみるのも楽しい。

【母屋】

母屋は、街道に平行と直角に配置された二棟からなり、屋根はＴ字型となる「撞木造り」となっていて、関川村に多い様式である。母屋を南北約30mにわたって貫通する通り土間は、上部は吹抜で、土間に面する茶の間や台所とともに壮大な空間をつくっている。玄関から茶の間にかけては室内に漆塗りが施され、随所に欅の良材が使われる一方、大座敷などには、吟味された無節の柱や丸桁、敷板が惜しみなく用いられ、格式と繊細さを併せ持つ建物である。

大座敷

【庭園】

庭園は心字池を中心に穿ち築山を配し、小規模ではあるが池泉回遊式になっている。江戸中期、京都遠州流庭師を招き構築され、庭匠田中奏阿弥の修復を経て昭和38（1963）年に国の名勝に指定された。

庭園から大座敷を見る

建物名称	渡邉邸
建築年	1817（文化14）年再建
構造・様式	木造二階建・撞木造
所在地	新潟県岩船郡関川村下関904
電話	0254-64-1002
HP	http://www.watanabetei.com/
開館時間	9:00～16:00（12/29～1/3除く）
アクセス	車：日本海東北自動車道 荒川胎内ＩＣから約20分 電車：ＪＲ米坂線越後下関駅から徒歩5～10分
備考	国指定重要文化財、国指定名勝

北方文化博物館

ほっぽうぶんかはくぶつかん

新潟県新潟市

大広間より主屋を見る

北方文化博物館は戦前最盛期には1,385万㎡の田畑を所有した豪農伊藤家の住宅であったが、「博物館をつくり財産のすべてをこれに寄付する」という当主の決断により私立博物館第１号として昭和22（1947）年4月に国の許可を得て、現在に至る。8,800坪（29,100㎡）の敷地に建坪約1,200坪（3,967㎡）部屋数65を数える近代和風大邸宅である。

【主屋】

主屋は腰屋根を持つ寄棟桟瓦葺きで、１階に土間、帳場、三間続きの茶の間、50人以上の従業員の食事を賄った炊事場、居室等が有り、南東に中庭を望む下屋一間廊下が配され、奥の間、新奥、新座敷へ接する。

２階は帳場上に三間の和室、一面板張りの間がある。

【大広間棟】

大広間棟は入母屋せがい造り桟瓦葺きで、間口2間半の独立した入母屋造りの大玄関が配され、奥行き三尺五寸の欅一枚板の式台など造作材には全て欅が使用されており、重厚な作りとなっている。襖を取り払うことで100畳敷きの広間になる空間は二間幅の床の間を有する32畳の大広間、下手に四間続き田の字に配され15畳の中段の間、1間半の床の間1間半の棚を持つ16畳の上段の間と二つの脇座敷へと続く。棟の三方は廊下土庇で囲む。最も格式ある間として年に数回のみ使用された。

見どころ

主屋廊下軒桁は長さ16間半(30m)末口6寸の杉一本物で建物の特徴として語られる。会津から阿賀野川で運ばれ、敷地までの運搬の際には曲がりきれず障害となった家屋を壊して運んだと言われる。

大広間

大広間棟三方に配された廊下はせがい造りの土間庇に、主屋には及ばないが杉一本軒桁により柱の無い釣欄間で庭園との一体感を生み出す。主庭園は銀閣寺ゆかりの田中泰阿弥(新潟県柏崎出身)の作庭

【三楽亭】

大広間棟の大工の仕事を気に入った五代当主が六代になる息子に設計させ、建築した。数寄屋風書院で茶室としても使用された。正三角形の平面で約11坪、柱・建具の殆どが三角形か菱形等とした独創的で入念な細工が施された建物。

主屋小屋組みは元口一尺二寸長六間半の梁を架けた上に直行した梁を六重にも及び架けた構造は、雪国新潟においても重厚すぎる構造と言って良い。

このように重厚な構造、上質な造作は伊藤家の豊富な財力に裏付けされて建てられた物であり、近代和風建築として、後世に伝え残すべき価値のある建物といえる。

（参考資料：近代和風建築総合調査報告書）

建物名称	北方文化博物館
建築年	主屋：1887(明治20)年、大広間棟：1889(明治22)年
構造・様式	主屋：木造二階建、大広間棟：木造平屋建
所在地	新潟県新潟市江南区沢海2-15-25
HP	025-385-2001
電話	http://hoppou-bunka.com
開館時間	9:00～17:00(12月～3月は16:30まで）年中無休
アクセス	万代シティバスセンターよりバス上沢海博物館前下車徒歩2分
備考	国登録有形文化財

旧齋藤家別邸

きゅうさいとうけ べってい

新潟県新潟市

敷地の中央に取られた池泉と南側に配された主屋＊

明治から昭和初期にかけて、新潟の三大財閥の一つに数えかれた 衆議院議員・貴族院議員を歴任した豪商四代齋藤喜十郎が大正7（1918）年に建てた別荘。砂丘地形を巧みに利用し、都会でありながら 深山幽谷の趣を仕立て、周辺には見られない滝や沢流れ、池泉といった水辺空間をつくり上げた回遊式庭園の中にある。作庭者は、東京の二代松本幾次郎ともその弟亀吉とも言われており、完成までには３年の歳月と巨万の費用をかけている。庭園には、浩養園(東京都墨田区)など、かつての江戸の大名庭園から選び抜かれた数多くの名石や石造物が運びこまれている。

庭園と建物を一体ととらえる「庭屋一如」の趣向で造られた開放的な建築で、随所にさりげなく銘木を使うなど巧みな演出がなされている。敷地の中央に池泉を大きくとり、主屋と蔵を南側に配置している。庭園に面した北側の開口部からは室内には日差しが入らない。主屋は東西に長く南北に風が抜ける。雁行型の平面形で各室から異なる庭園の景色が楽しめる。

２階手摺の提灯型開口

１階大広間＊

１階大広間は書院造で格式の高い造りになっている。縁側部分の内部は畳敷きとし、外側は板敷で１階の手摺は寺社に用いる勾欄をベースにしている。また、２階の手摺は堤灯型の開口が透けるようなデザインを施すことにより、庭との一体感を感じることができる。各部屋の床の間周りに銘木材を多用し、欄間周りに透かし彫を施すなど数寄屋風の造作が多くみられる。２階座敷の天井にも屋久杉が使用されているなど各種の銘木材が使用されている。質の高い数寄屋建築である。床は床の間と床脇からなり、設計者のデザイン力が発揮される場所である。真、行、草の構えがあり本邸に備えられた床を見比べていくとその違いが理解できる。

見どころ

座敷の造作に彫刻を施すなど優れた工匠の技術、各種銘木材を多用した数寄屋風の造作など、当主の好みを反映し贅をつくした近代和風建築である。また庭園は砂丘地形を利用して造った池泉庭園であり「大正期における港町・商都新潟の風土色豊かな庭園の事例として優秀な風致を伝えることから、芸術上の価値及び近代日本庭園史における学術上の価値は高い」として平成27（2015）年3月、国の名勝に指定されている。

本邸に足を踏み入れると外光を遮るように板戸絵があり、その暗さに目が慣れた時に大広間から見える庭園が現れる。建物の配置を南にすることで、庭園への眺望を順光にし、自然のやわらかい光を取り入れる間取りになっていることが、住居とは違う別邸ならではの造りになっている。

建物名称	旧齋藤家別邸
建築年	1918(大正7）年
構造・様式	木造二階建
所在地	新潟県新潟市中央区西大畑町576
電話	025-210-8350
HP	http://saitouke.jp
開館時間	9:30～18:00（10月～3月　9:30～17:00）月曜休館 12/28～1/3　休館
アクセス	新潟駅万代口バスターミナルよりバス15分
備考	国指定名勝 写真: 旧齋藤家別邸ＨＰ＊新潟県近代和風総合調査報告書

松籟閣

しょうらいかく

新潟県長岡市

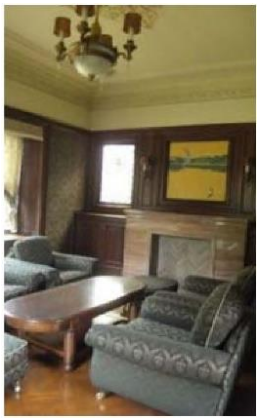
上：表門より臨む。正面に正玄関を構え住宅の中核となる。
正面向かって右側に応接棟が建つ。

松籟閣は朝日酒造株式会社の創設者、平澤與之助が建てた住宅。
「松籟」とは松の梢を吹く風の音のこと。
国の重要文化財の指定を受けたこの建物は、伝統的な日本家屋で、当時の流行デザインがふんだんに採り入れられており見応えがあるので何度でも訪れたくなる。
正玄関の奥の「松籟の間」と呼ばれる茶の間は12畳半の広さと高い天井の大空間に力強い印象を受けるが、縁側に向いた障子戸や書院障子の細かい格子からは繊細さも見受けられる。美しい格子は「小座敷」の腰窓や「朝日の間」の欄間にも施されており、今の時代に同じものを作る技術を持った職人がいるかどうかを考えると、単に建築物としてだけではなく、目に見えない部分にも価値があると思われる。
平成16（2004）年に起きた新潟県中越地震で大きな被災を受けたが、復元され現在に至る。

見どころ

障子戸、欄間、書院障子には細い桟が組まれており、部屋ごとに趣きが違っている。どれだけの技術を持った職人が時間をどのくらいかけ造ったものなのか。美しく繊細な桟に見とれてしまう。

縁側のガラス戸には格子の四隅に、手間をかけて彫られた細工が施されている。どんなに時代が変わっても、そのデザインには目を引かれることだろう。美しいだけでなくガラス戸の強度を高める力にも役立っている。



昭和9（1934）年9月に建築された応接棟。応接棟は、外観も洋風で内部にはアールデコの影響を受けた暖炉やシャンデリア、ステンドグラスなどの装飾が施され、昭和戦前期の最先端デザインを残している。

建物名称	松籟閣
建築年	主屋・寝室棟　1934（昭和9）年
構造・様式	木造二階建、入母屋造、妻入、桟瓦葺
所在地	新潟県長岡市朝日980-1
電話	0258-92-3181
HP	https://www.asahi-shuzo.co.jp/visit/shouraikaku/
開館時間	11:00～15:00 4月～10月、月・水・金・土
アクセス	ＪＲ来迎寺駅から徒歩15分 関越自動車道　長岡ＩＣから15分 長岡南スマートＩＣから約3分
備考	国指定重要文化財